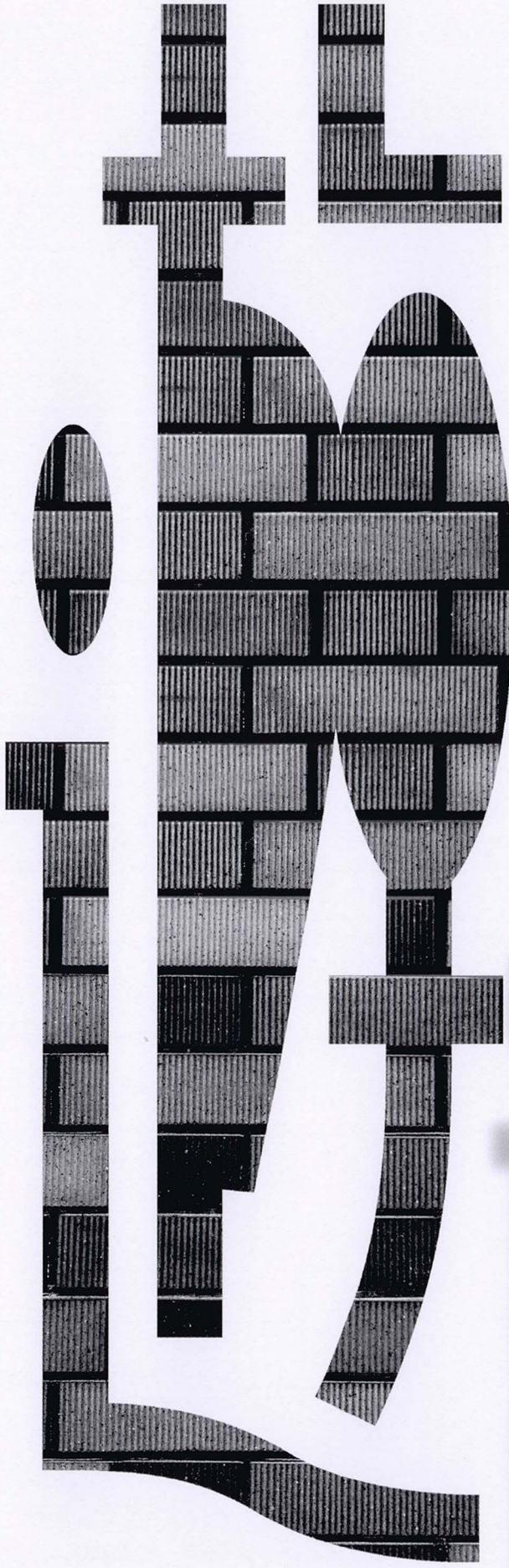
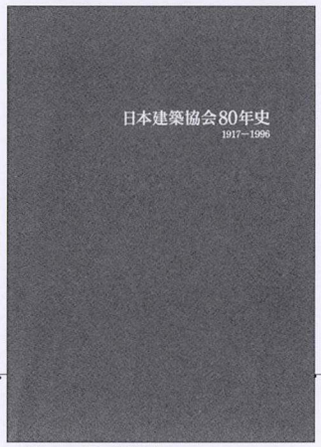
建築と社会

Architecture and Society
2007
No.1022
日本建築協会
05

特集：あそび　考





「日本建築協会80年史1917-1996」

増刷頒布中　頒価　3,000円

1999年７月に発刊した「日本建築協会80年史1917-1996」は、各方面から好評をいただいておりますが、このたび、皆様の強いご要望により、増刷・頒布することにいたしました。大正６年３月30日に関西建築協会として誕生した日本建築協会の80年の歴史を、様々な事業や委員会活動を通じて、また、本会設立者の片岡安、武田五一以降現在までの会員たちの社会活動を通して知ることができる記念誌として、A4判・240頁にまとめています。

とくに、協会草創期の大正・昭和初期の片岡安ら協会のメンバーと当時の大阪市長・関　一との交流を物語る一文は、大阪の都市計画史、あるいは関西の建築人物誌ともなっています。本会の歴史を知るだけでなく、建築を通して、それぞれの時代の雰囲気を身近に感じることができる大変貴重な資料となるものです。

購入ご希望のかたは、下記要領でお申し込み下さい。

＊

申 込 先　社団法人 日本建築協会
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階B室
TEL 06-6946-6981　FAX 06-6946-6984

頒　　価　１部3,000円（税・送料込み）

※増刷部数には限りがございますので、お早めにお申し込み下さい。

「日本建築協会80年史」

A4判・240頁・並製本

●日本建築協会の沿革／委員会活動／「建築と社会」の変遷／大正時代から現在までの本会主催の博覧会・展覧会・講演会／よろず相談住宅展／青年建築家・青年技術者顕彰／工高生デザインコンクール入選者etc.

●日本建築協会創立者と会を支えた38人のプロフィール（片岡　安・設楽貞雄・武田五一・池田　實・波江悌夫・竹腰健造・尾崎久助・東畑謙三・塚本猛次・福田朝生・佐野正一・葛野壯一郎・横濱　勉・松本禹象・宗　兵蔵・園部文雄・日高　胖・野村一郎・古宇田　實・松室重光・松井貴太郎・安井武雄・中澤誠一郎・坂　靜雄・今林彦太郎・井上新二・松本儀八・池田宮彦・錢高輝之・中西六郎・大林芳郎・鴻池藤一・伊東五郎・竹中錬一・鷲尾健三・松村雄吉・横尾義貫・足立　孝）

●座談会「戦中から戦後初期の協会活動」―尾亀清四郎・大林芳郎・小西　岬・佐野正一・横尾義貫・三品哲夫の6氏による終戦前後の協会活動の証言―

＊

■執筆ワーキンググループ
坂本勝比古／安達英俊／石田潤一郎／植松清志／梅宮弘光／桐浴邦夫／酒井一光／橋寺知子／山形政昭／吉田高子／和田康由

■80年史編纂委員会
長谷部朝郎／安達英俊／近藤達夫／谷淳之介／十倉　毅／原見昌志／和田康由／吉田悦二


日本建築協会の遺産と功績

「日本建築協会の遺産と功績」（坂本勝比古）より


第2編　それぞれの時代を担った人々の活躍

片岡　安

「草創期の人々」より片岡安の項

池田啓氏講演会と会員交流懇親会の開催

来る６月14日（木）開催の日本建築協会通常総会終了後、総会出席者及び会員を対象に、右記のとおり講演会並びに会員交流懇親会を開催いたしますので、多数のご参加をお願いします。

平成19年度
通常総会開催 予告

と　き　2007年 6 月14日（木）
　　16：00から
ところ　大阪マーチャンダイズ・マートビル地下１階
　　ギャラリー
議　題　①平成18年度事業報告
　　②平成18年度収支決算
　　③役員改選の件

総会の正式開催通知は、５月下旬に各会員あて、別途送付します。

■池田啓氏講演会

池田啓氏は、兵庫県立大学教授、兵庫県立コウノトリの郷公園研究部長。動物生態学、保全生物学の研究者であり、また、コウノトリの野生復帰事業を推進しておられます。いわば、Thinkだけでなく、実践―Act―する人ということができます。

おそらく、動物にとって住みよい環境とは、人間にとって暮らしやすい環境であるはずです。池田氏にお話をいただきながら、地域創造に必要な条件とは何かを皆で考える場としましょう。

演　題　「地域の中で自然を保全する―ThinkもActもローカルで」
講　師　池田　啓氏
と　き　2007年 6 月14日（木）
　　16：50～17：50
ところ　大阪マーチャンダイズ・マートビル　地下１階
　　ギャラリー
　　大阪市中央区大手前1-7-31
定　員　100人（参加費無料）
申込先　㈳日本建築協会総務課あて、下記のいずれかでお申し込みください。
　　TEL　06-6946-6981
　　FAX　06-6946-6984
　　Email　soumu@aaj.or.jp
申込締切　６月４日（月）

■会員交流懇親会

会員相互の情報交換、交流、親交を深めるため会員交流懇親会を開催。

と　き　2007年 6 月14日（木）
　　18：00～19：45
　　（講演会に引き続き開催）
ところ　東天紅（大阪マーチャンダイズ・マートビル　20階）
会　費　5000円（当日徴収）
　　事前にお支払いいただく場合は下記口座へ。
　　郵便振替口座 00910-9-39975
　　口座名義 社団法人日本建築協会
申込先　㈳日本建築協会総務課あて、下記のいずれかでお申し込み下さい。
　　TEL　06-6946-6981
　　FAX　06-6946-6984
　　Email　soumu@aaj.or.jp
申込締切　６月４日（月）

■池田啓（いけだひろし）氏プロフィール



●1950年山口県生まれ
1973年九州大学理学部生物学科卒業
1979年九州大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士。
ニホンザルの食性と行動域の関係、タヌキの社会生態学をもとにしたイヌ科の社会進化、アフリカで有蹄類および食肉類の研究を行う。
1984年文化庁文化財調査官。天然記念物の指定や保護を担当。
1999年より現職。コウノトリの野生復帰事業を推進する。
専門分野は動物生態学、保全生物学。

●所属学会
日本生態学会、日本哺乳類学会、日本動物行動学会、日本霊長類学会、野生生物保護学会、日本アフリカ学会、生き物文化誌学会、日本エコミュージアム研究会

●主な著書
『但馬のこうのとり』（共著）、但馬文化協会(2006).『コウノトリ再び空へ』（分担）、神戸新聞総合出版センター(2006).『自然再生』（分担）、ソフトサイエンス社（2005).『生態学からみた野生生物の保護と法律』（分担）、講談社サイエンティフィク（2003).『週刊日本の天然記念物』（総監修）、小学館（2002).『哺乳類の生態学』（共著）、東京大学出版会（1997）ほか

講演会・懇親会FAX申込書（きりとり）

1．申込区分（○印をお願いします）
　①講演会のみ参加　②懇親会のみ参加　③講演会・懇親会の両方参加

2．６月14日の通常総会出席予定（○印をお願いします）
　①出席予定　②欠席予定　③未定
　（総会開催通知は５月下旬に各会員あて別途送付いたします）

3．懇親会会費の事前振込（○印をお願いします）
　①あり　②なし

申込者氏名	
ご連絡先	（職場・自宅）
ご連絡先TEL	

日本建築協会 創立90周年 記念事業実施



祝賀会で開宴のあいさつをする佐野吉彦会長

■社団法人日本建築協会
創立90周年記念式典
と　き　2007年３月30日（金）
ところ　東天紅（OMMビル20階）
　　大阪市中央区大手前1-7-31
出席者　来賓45名
　　一般参加者69名

①記念式典（15：30～16：15）
●初めに、日本建築協会・佐野吉彦会長が壇上に立ち、90周年を「100年を見据えて歩み出す１年とする」と、建築協会のさらなる発展を会員諸氏に訴えた。
●布村明彦・国土交通省近畿地方整備局長、太田房江・大阪府知事、關淳一・大阪市長、村上周三・日本建築学会会長からの祝辞が、来賓として出席した参会者から代読された。
ここでは、さまざまな分野の会員で構成される日本建築協会の支援と協力が要請された。
▽国土交通省
（代読・坂真哉建政部長）
一昨年11月からの、国民の建築行政・建築業界への信頼、建築物の安全性への信頼がもろくもくずれたことに触れ、国土交通省として「19年度から近畿地方整備局建政部内に建築安全課を設置すること」など、国の取り組みを紹介した。そして、設立以来90年にわたり建築にかかわる業務の改善・発展に努めてきた日本建築協会の功績に対し、謝意が述べられた。
▽大阪府
（代読・吉田敏昭住宅まちづくり部技監）
住まいとまちづくりに関する施策を一体的に展開するための指針「住宅まちづくりマスタープラン」を策定し、10年後に府内の住宅・建築物の耐震化率90%達成を目指していることが明らかにされた。
これらの取り組みを進めるためには、社会貢献の理念を柱に結集した日本建築協会会員の豊富な技術や経験、総合力が必要だとの要請があった。
▽大阪市
（代読・貝野猛住宅局建築指導部長）
「住むまち」としての大阪の魅力を高めるため、伝統的な長屋・町家の修景に取り組む「HOPEゾーン事業」や、大阪市の市有財産の友好活用を図る「資産流動化プロジェクト」の推進により、多くの「人・もの・情報」が集まり、活力と魅力に満ちた「創造都市大阪」の実現を目指していることが述べられた。
そして、大阪市政全般にわたる改革を推進するために、会員の支援と協力が求められた。
▽日本建築学会
（代読・嘉納成男日本建築学会副会長）
創立以来、自由闊達な気風を大切にし、住宅問題や都市計画にかかわる啓発活動に力を入れてきた日本建築協会も含め、建築界は近年の社会的重要問題に真正面から取り組む必要があることを呼びかけた。

②第７回日本建築協会賞表彰式
【日本建築協会賞】
・有形の「道具」と無形の「技術」の保存と伝承
㈶竹中大工道具館理事長 竹中統一
・ヨドコウ迎賓館（旧山邑家住宅）の保存と活用
㈱淀川製鋼所取締役社長　國保善次
・西梅田エリアの電力負荷平準化の計画と実施
㈱竹中工務店設計部設備部長　田ノ畑好幸・〃 設備課長　小宮山研二
【日本建築協会賞特別賞】
・大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）
大阪市立住まいのミュージアム

③シンポジウム（16：25～18：25）
神戸芸術工科大学名誉教授・坂本勝比古氏の基調講演「関西の近代建築を支えた人々」は、パワーポイントで豊富な写真を示しながら、予定時間を超えて聴講者148名をタイムスリップさせるひとときであった。
続いて、大阪ガスエネルギー・文化研究所の栗本智代氏、竹中工務店・松隈章氏、司会に佐野吉彦・日本建築協会会長を交えて、パネルディスカッション「都市づくりに活かす“近代建築力”」に移った。

④祝賀会（18：35～19：35）
来賓をはじめ関係者105名が参加し、会長の開宴の挨拶で祝賀会は始まった。東天紅の会場では、終始和やかな交歓の風景が繰り広げられたが、門川清行・副会長の閉宴の挨拶で幕を閉じた。
（来賓の肩書きは、３月30日当時）

■日本建築協会に多大なご支援ご協力を頂いた団体及び個人

新たに80周年以後、日本建築協会に多大なご協力をいただいた以下の団体及び個人を、90周年を機に、協会の90周年記念事業に名前をとどめる。

●団体の部
㈱淺沼組、王建工業㈱、大阪ガス㈱、㈱大林組、㈱奥村組、鹿島建設㈱、㈱きんでん、㈱熊谷組、栗原工業㈱、㈱鴻池組、清水建設㈱、㈱昭和設計、住友電設㈱、㈱錢高組、大成建設㈱、ダイダン㈱、㈱竹中工務店、㈱東畑建築事務所、戸田建設㈱、豊國建設㈱、西松建設㈱、㈱日建設計、㈱フジタ、㈱安井建築設計事務所、八千代電設工業㈱、㈱ユニオン

●個人の部（敬称略・故人を含む）
金多　潔、井上　豊、錢高善雄、淺沼誠夫、岩橋貞雄、多井幸男、川口順弘、栗原信英、鴻池一季、菅谷　節、竹中統一、永原義夫、西川秀信、原田孝太郎、伴　昭秀、松村雄吾、和田克朗、浅海伸之、井上弘美、井村眞哉、神谷　治、下村健治、高岸宗吾、月城則男、鶴田昭一、寺本英一、松本壮一郎、盛田輝勇、山形政昭、赤木　隆、稲木裕子、伊縫憲幸、上杉秀隆、植田　実、梅村宏尚、江副敏史、大谷由紀子、加藤　力、川上比奈子、河津隆之、北浦かほる、倉渕奈千子、小椎八重猛、笹村欽也、佐藤不二男、清水麗子、菅野忠司、田中直人、田ノ畑好幸、塚本史郎、中村孝之、中村文紀、刃金国雄、前川治彦、桝井貴廣、増田敬彦、増渕昌利、松川敏正、村上幸三郎、山本　匡、横関真紀、有田吉弘、石井太志、伊藤　博、小笹光彦、紙西孝彦、河合哲夫、久保田秀男、阪田弘一、佐々木晴子、島　隆男、瀬戸川葆、谷本敏和、樋上新治、福島靖夫、増田昌彦、松浦剛士、廻はるよ、三好　曠、森田芳次、山田和弘、大西正宜、景山公三、小池啓夫、小久保到、佐貫　久、高橋憲昭、武田雄二、田中克治郎、永島敏郎、南部幸仁、藤井孝晏、森　啓亮、山岡　徹、吉井和男、荒川治徳、井上まるみ、上原正行、植村典人、楠本照男、志賀咲穂、阿部　修、井上　享、河津龍大、小谷陽次郎、近藤達夫、阪本重信、西出　浩、堀内三郎、元木貞次、佐貫　久、設楽貞樹、関川詞之、高熊　満、佐渡政勝、佐野洋治、堀　政広、黒田智子、吉羽逸郎、井出正己、卯田隆一、田中俊介、野口桂三、望月秀祐、山田昌次、佐々木史郎、辻　誠治、森畑　武、植田　明、尾崎武寛、鈴木慶智、仙田　篤、寺本英一、中村嘉男、中村哲士、野崎　勉、細田泰彦、森　鉦一、森田富士男、山本敦子、芳山明久、小池康雄、阪本良二、中野久生、中村貞夫、

●50年以上継続会員
相原　胖、淺沼誠夫、池田有隣、石川　修、上田宏二、上林博雄、粂井弥平、小西　岬、金剛利隆、品川二三男、城口庸平、神保計雄、末岡利雄、杉田和雄、杉山俊夫、高田秀三、竹原　博、田村真二、辻野純徳、恒成　恒、徳岡昌克、徳永義文、中森　修、西尾介治、長谷川哲之助、平井　勇、藤井重信、馬田廣行、松田隆之、松永崇志、松村慶三、三原清敬、森　粛之、森田孝雄、和田克朗、渡邊正夫

●永年事務局職員
柴谷由紀（京都支部）

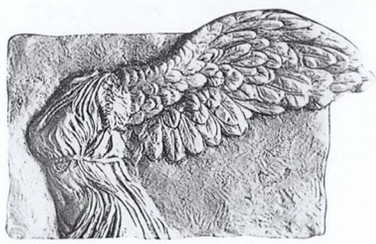
主催　日本建築協会

平成19年度　**第53回工高生デザインコンクール**

設計課題　こども園

課題の趣旨

少子化の進行や教育・保育に対する保護者の要望の多様化にともない、幼稚園と保育所の機能をあわせもつ、こども園が創設されています。こども園では、年齢差のあるこども達が適切な集団を保つことで、さまざまな遊びや学習の場が広がることが期待されています。また同施設が行う子育て支援などは、保護者の不安などの解消にも役立つとともに新たな交流の場ともなるでしょう。



入選賞牌

本課題では、これまでの幼稚園や保育所とはひと味異なる、室内や屋外で多くのこども達が自由に楽しく過ごせるような、認定条件にとらわれない新しい提案を期待しています。

設計条件

1．敷　　地：敷地の大きさは2000㎡程度。
2．規　　模：規模は700㎡程度。階数は自由とする。
3．所 要 室：保育室、乳児室・ほふく室、遊戯室、職員室、保健室、便所、調理室など。
4．そ の 他：上記の室以外に必要と思われる室やスペースは適宜設けてもよい。

所要図面

1．配 置 図：縮尺自由、敷地形状は自由。周辺の状況、道路との関係、方位などを明示する。
2．平 面 図：縮尺1:100
3．立 面 図：縮尺1:100（2面以上）
4．断 面 図：縮尺1:100（1面以上）
5．透 視 図：設計意図が最も反映するところ（アイソメも可）。着色仕上げ。模型写真に代えてもよい。
6．設計説明：設計意図を表すサブタイトルをつけることが望ましい。設計趣旨（立地、周囲の状況などについての説明を含む）および建築概要（敷地面積、建築物の構造・階数および床面積など）を示す。
7．そ の 他：平面図、断面図には、室名・寸法を記入する。上記以外に必要と思われる図面は加えてもよい。

応募条件

1．用　　紙：製図用紙Ａ１判（594㎜×841㎜）１枚を使用し、その中にすべての要求図面を描くこと。
2．仕 上 げ：図面は黒色鉛筆仕上げとし、ワープロ、ＣＧ、（透視図を含む）やＣＡＤ、スクリーントーンなどによる仕上げは禁止する。（ただし、色鉛筆による着色は可）
透視図は彩色用紙を用い、製図図面にのりづけしてもよい。
透視図や模型写真以外のものを貼りつけることや、図面のパネル化は行わないこと。
3．応募資格：平成19年４月現在、高等学校在籍の生徒で、個人または共同で制作したものとする。
4．そ の 他：用紙や図面には、学校名・学年・氏名など応募者がわかるような表示は行わないこと。
※以上の条件に違反した応募作品は、失格とすることがある。

応募方法

1．別紙用紙に、学校名・所在地・学年・氏名を記入し、封筒に入れ密封し、図面の裏に貼りつけること。（記入用紙が足りない場合は複写して下さい）
2．共同制作で応募する者は、１.の記入用紙に連名のうえ、代表者に丸印をつけること。
3．応募作品は学校を通じて提出すること。

締切期日

平成19年９月28日（金）の消印をもって締め切る。

送付先

〒540-6591 大阪市中央区大手前１丁目７番31号
大阪マーチャンダイズ・マートビル（OMMビル）７階（私書箱107号）
社団法人 日本建築協会　第53回工高生デザインコンクール係
TEL.06-6946-6981　FAX.06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp　URL：http://www.aaj.or.jp

入選作品の数および賞

1．入選作品は10点とする。
2．入選作品のうちから最優秀賞１点、優秀賞２点を選び、賞状および賞牌を贈る。
3．他の入選作品には、賞状および賞牌を贈る。
4．応募者全員に参加賞を贈る。
※入選作品の版権は本会に属し、また入選作品は本会にて保管する。

入選者発表

審査の結果は、各学校ならびに本人に通知するほか、本会の会誌「建築と社会」11月号に発表し、入選作品は翌年１月号に掲載する。

審査員（50音順・敬称略）

委員長　林　　浩二／㈱大林組本店建築設計部部長
委　員　井上　久実／井上久実設計室主宰
　　木村　博昭／京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授
　　久保　清一／大阪芸術大学芸術学部建築学科教授
　　佐々木　栄／㈱昭和設計都市・建築本部第１設計部長
　　笹村　欽也／㈱東畑建築事務所大阪事務所設計部部長
　　田代　　純／大阪工業大学工学部空間デザイン学科教授
　　寺岡　宏治／㈱安井建築設計事務所設計部部長
　　徳岡　浩二／㈱徳岡昌克建築設計事務所代表取締役社長
　　長坂　　大／奈良女子大学生活環境学部住環境学科助教授
　　浜田　　徹／鹿島建設㈱関西支店建築設計部長
　　平田　隆行／和歌山大学システム工学部環境システム学科助手
　　増田　俊哉／㈱竹中工務店大阪本店設計部第４設計部門設計担当副部長
　　吉羽　裕子／I. F. Architects代表
　　渡辺　豪秀／㈱日建設計設計部門設計室長

このコンクールは、高校生の設計技能の向上を目的とし、昭和30年より毎年テーマを変えて開催しています。

今年は10月号掲載で、応募締め切りが7月下旬となります!

若き創造者たちへ

「建築と社会」平成19年10月号
「第54回青年技術者特集号」へのおさそい

日本建築協会誌「建築と社会」は毎年「青年技術者特集号」を企画し、すでに53回にわたって若き優秀なプランナー、アーキテクト、エンジニアをめざす人たちを紹介してきました。

今回も、青年技術者選考委員会を設けて、青年技術者を選考いたしますが、昨今の建築に携わる技術者の多様化を考慮し、設計だけに限らず、計画、構造、設備、施工およびその他広く、建築に関連する分野から、優秀な青年技術者を募って、その不断の研究努力とすぐれた実績への情熱などを、「建築と社会」に掲載し、顕彰することにしております。

54回の企画にあたり、日常目立たない対象の実績も含めて、優秀な実績を積まれている青年技術者のみなさまのご応募をお待ちしております。

応募提出規定

1．応募される人は満35歳（平成19年７月末日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。

2．原則として、本会会員であるすいせん者を通じて応募する。

すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。

3．応募分野は特定しない。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等々その他の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要の資料を1部、本会に期日までに提出する。

4．提出された資料は「青年技術者選考委員会」にかけて選考する。（なお、提出資料は特に指示のない限り返却はいたしません）

5．「青年技術者選考委員会」において選考された青年技術者は「第54回青年技術者特集号」（平成19年10月号）に掲載するとともに、表彰式を行い、記念品を贈呈する。

6．提出資料

■すいせん用紙

請求は、すいせん依頼先担当部署、または本会事務局へ。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

資料は、④を含めて**A3判用紙5枚以内にまとめる。**

①　設計の場合――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

②　計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）――上に準じた資料

③　上記以外の分野の場合――それぞれの分野にふさわしい資料

④　上記①～③のいずれかの資料の実績において、応募者本人が関与した程度、役割、立場等を明らかにし、資料中、**本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明、考え方および将来的展望などについて、2000字以内に平易簡明にまとめたもの**（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者・本人の執筆に限る。**このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。**

7．**提出期限**　平成19年7月30日（月）

8．**提出先**　日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
電話　06-6946-6981　FAX. 06-6946-6984
Email：ken-sha@aaj.or.jp

9．**青年技術者選考委員会**（平成19年度）

委員長　設楽　貞樹／安井建築設計事務所常務取締役

委　員　佐々木正人／竹中工務店プロジェクト開発推進本部長
松村　孝治／東畑建築事務所取締役[illegible]
木多　道宏／大阪大学大学[illegible]
瀬戸本　淳／[illegible]
樫原　健[illegible]／エンジニアリング部長
西山　[illegible]
田辺　光[illegible]
伊藤　昌[illegible]
池田　孝夫／大成建設関西支店建築部品質管理室長
釘吉　　敬／大林組本店建築生産技術部長

折衝中

平成18年度から、青年技術者の公募は早めています。第54回青年技術者は、本年7月30日(月)までに応募できるよう準備をお願いします。

建築と社会

Architecture and Society

2007
No.1022
日本建築協会

05

■特集予告
6月号／こだわりが創る住まいのカタチ
7月号／住まいの設備と空間の移り変わり

編集委員会（平成19年度）

■副会長
井上　豊
中井　進
■編集担当理事
上原　正行
岡田　聿之
木戸　徹
佐藤　栄一
佐藤友美子
◎設楽　貞樹
竹中　統一
立成　良三
吉村　英祐
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
飯田　匡
鈴木　克彦
田中　直人
高橋　和也
辻　武之
紅谷　昇平
松田奈緒子
△三宅　次郎
森　康郎
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
安部　新二
△荒木　宏之
江副　敏史
奥村　朋孝
菅野　忠司
神戸　嘉也
木多　彩子
楠　敦士
小林　優子
所　千夏
野田　隆史
桃杷　健一
松森　織江
★インテリア・住宅系
阿部　泰浩
加藤　力
神谷　浩司
黒柳　亮
高野　直樹
田中　浩介
戸井賢一郎
ペリー史子
本山　仁
■構造分科会
秋田　智
岸本　光平
瀧野　敦夫
鶴田　潤
中塚　光一
難波　尚
肥嶋　好浩
房安　智也

松村　健
向井　洋一
安野　郷
■設備分科会
△赤澤　正治
石井　勝秋
梶井　宏修
河井　康人
近藤　国夫
谷野　太志
夏井　重行
福谷　周
桝井　貴廣
村上幸三郎
山下　修
■施工材料分科会
桜井　和男
平田　茂良
△藤丸　啓一
松元　秀樹
山岡　篤人
吉田　正友
■法令分科会
赤井　英稔
伊賀　誠
△片岡　正和
金本　忠義
谷本　和子
中迫　悟志
文山　達昭
■作品作風小委員会
石塚なぎさ
居内　章夫
○井上　雅祐
稲垣　和江
池上　明
岩佐　進
加嶋　章博
倉渕奈千子
澤田　純一
戸川　勝之
牛野　淳司
西田　佳代
芳谷　晴彦
増田　敬彦
山田　俊紀
■広告企画小委員会
荒木　俊明
今井　成年
大竹　賢次
○虎谷　伸幸
○前田　衛
南澤　浩司
森川　幸信
■10年委員会
赤木　隆
川上比奈子
中村　文紀
○前川　治彦

◎委員長　○副委員長　△幹事

印　刷　2007年4月25日
発　行　2007年5月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
振替口座　00910-9-39975
印刷所　㈱NPCコーポレーション
定　価　1200円〔税込〕

Journal of the Arghitectural Association of Japan

特集　あそび考

総論1　人・まちと「あそび」の関係を考える

「富裕層」「シニア層」のライフスタイルにみる“あそび”
●竹内奉正 —— 12

あそびがひとの暮らしに与えるもの●吉田一平 —— 14

各論　今の「あそび」を読み取る

関西人の遊び場—全国に発信する甲子園文化—
●玉置通夫 —— 16

禁止事項のない遊び場づくりでめざすもの●大村虔一 —— 18

コミュニティカフェの試み●平田オリザ —— 20

遊びを生みだす出会いと発見
—チンパンジーの遊びと環境—●松阪崇久 —— 23

都市（マチ）にあそぶ●李　有師 —— 25

あそび心が作品をつくる〈インタビュー〉●露の都 —— 28

総論2　これからの「あそび」

これからの日本を豊かにするための「あそび」考—“禁じられた遊び”の国、日本を解放しよう—●木津川　計 —— 30

会告　池田啓氏講演会と会員交流懇親会の開催．日本建築協会創立90周年記念事業実施．平成19年度第53回工高生デザインコンクール—設計課題：こども園—．若き創造者たちへ—「第54回青年技術者特集号」へのおさそい—． 1

作品作風　日新信用金庫兵庫支店 6

研究の風景　橋本研究室
（椙山女学園大学 生活科学部 生活環境デザイン学科） 8

GAllery　平群の家（栫本重明）●倉渕奈千子 10

法令コーナー　京都府景観条例の施行
～協働により府民ぐるみで景観づくり～●岡本哲夫 35

構造の頁　「冷却取替工法」による免震装置の取り替え●安野　郷 36

information　「大阪が生んだ偉才　建築家・中村順平［誕生120年］」展．モダン・デザイン再訪：大阪コレクションズ．ル・コルビュジエ：フィルミニの教会—光りの軌跡—．ミュージアム見学会．すまい・まちづくりフォーラム関西21 講演会 ＜再発見＋再生＞大阪のまちとくらし．2007年度社団法人都市住宅学会関西支部総会関連催事．建設リサイクル法 府内一斉パトロール．第14回空間デザインコンペティション．『Les Images de Sadaharu HORIO』堀尾貞治展． 37

月間の動き　平成19年3月分 39

表紙　企画・デザイン　高橋 善丸



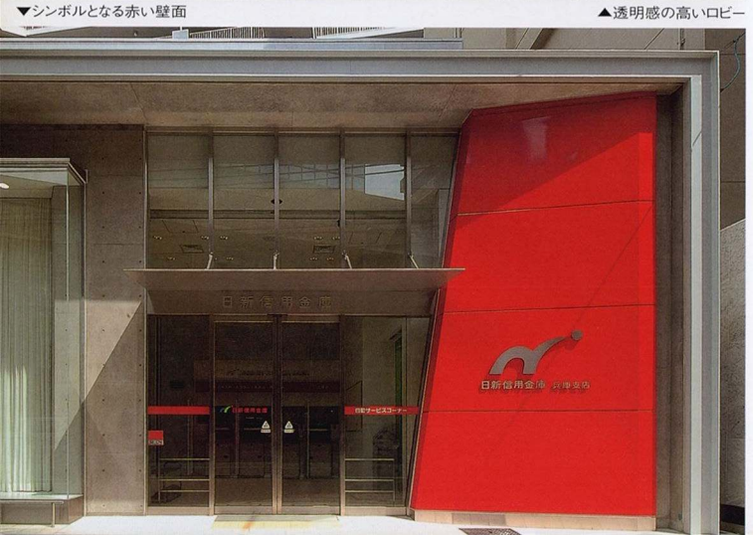
大庇



自然採光・通風のあるロビー



▼シンボルとなる赤い壁面　▲透明感の高いロビー



作品風

建築主■
日新信用金庫

設計・監理■
安井建築設計事務所

施工■
明和工務店

日新信用金庫兵庫支店

新たな地域で新たな顧客の創造を目指したデザイン

■認知性の高い新店舗の創造

敷地はJR兵庫駅南側の駅前に位置する。駅と敷地の間には超高層の建物が存在し、駅前広場や電車内からの視認性が十分に確保できる場所ではなかった。求められた課題は「**この支店をいかにこの地域に認知させるか**」ということであった。

電車内からの認知を最大限確保するため、建築全体と一体となる立体的な看板を敷地の角に設置した。駅からのアプローチにはシンボルとなる赤いスクリーンを玄関に設置、存在感のある「店舗の顔」を創造した。建物全体には金属的な表情を与え、21世紀を躍進するイメージとしてデザインした。ロビーは、顧客の「入りやすさ」を考慮して透明感の高いガラス壁面を採用、日新信用金庫の透明性、公正性を表現した。

■まちのにぎわい創りに寄与するボリューム構成

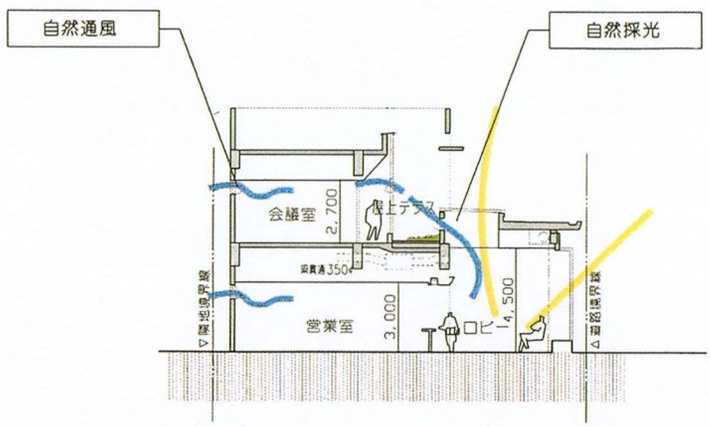
前面道路は年１回の祭りでにぎわう、地域にとって大切な空間である。これに平行して大きなピロティ玄関を有する特徴的な「大庇」を設け、道路空間と一体となる開放的な空間を創出した。建物ボリュームでは２階部分をセットバックすることで圧迫感を軽減し、明るく開放的な「まちなみ」を演出した。

明るく健康的なロビー・営業室

閉店時も業務が行われる金融建物の営業室では、開口部はシャッターなどがおろされ、自然採光・通風が確保できないことが一般的である。ロビーに大きなトップライトを設置することで自然通風・採光を確保し、閉店時にも明るく健康的な執務環境を実現した。

（川原村勝幸・南浦琢磨/安井建築設計事務所）

所 在 地 ――神戸市兵庫区浜崎通3-11
敷地面積 ――640.73㎡
建築面積 ――438.40㎡
延床面積 ――638.20㎡
構造規模 ――RC造、2F
工　　期 ――2005年９月20日～2006年４月30日
最 寄 駅 ――JR神戸線・兵庫駅
撮　　影 ――スタジオポストモダン



自然通風イメージ

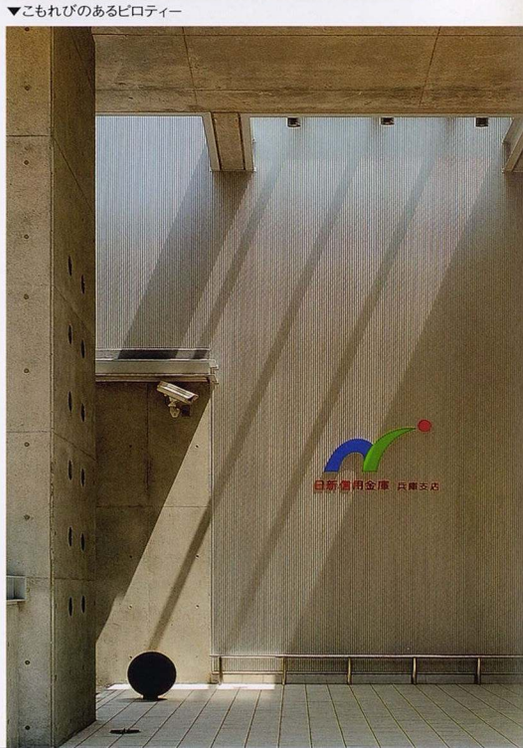
▲立体的な看板



▼全景



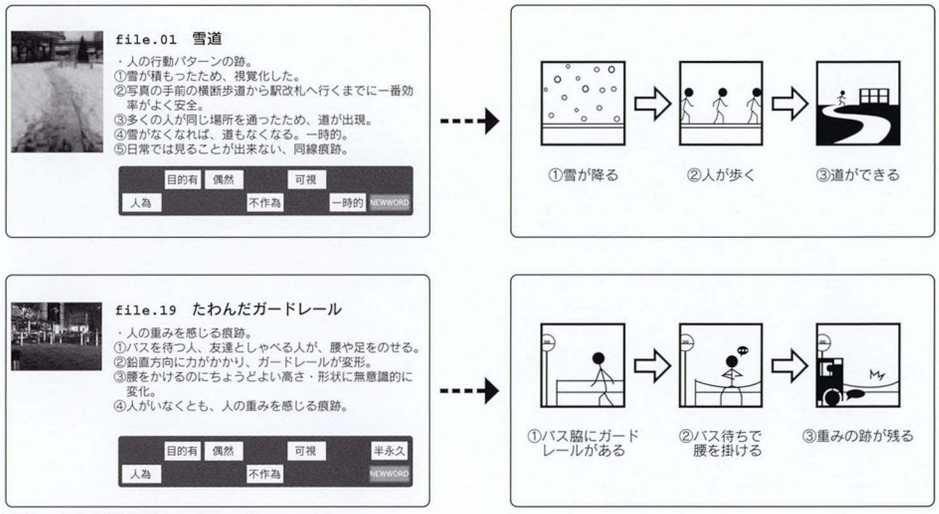
▼こもれびのあるピロティー



研究の風景

橋本雅好研究室

椙山女学園大学生活科学部
生活環境デザイン学科



痕跡の生成過程のピクトグラム化

【橋本雅好研究室とは】

椙山女学園創立100周年となる2005年に生活科学部生活環境デザイン学科へ赴任して2年が過ぎました。先日1期生が卒業したばかりで、まだまだ歴史が浅い研究室ですが、現在に至るまでの研究室の活動を報告したいと思います。

生活環境デザイン学科には、アパレルメディア分野、インテリア・プロダクト分野、建築・住居分野の3分野ありますが、分野にかかわらず、横断的・総合的に学ぶことができる特徴を持っています。

橋本雅好研究室はインテリア・プロダクト分野に所属していますが、インテリアデザインや建築計画、環境心理学を研究室の主要テーマに掲げ、学科の特徴と同様に、様々なテーマを卒業研究の対象としています。例年11名前後の学生が3年生の後期から研究室に配属され、卒業研究のテーマは各自が色々と悩んだ末、4年生になると同時に決めるという形を取っています。各自が日々の生活の中で興味があることや疑問を持っていることなどをテーマとすることにより、卒業研究に対する取り組み方が変わってくると考えています。指導する立場からすると、このような方法では、広く浅くとなってしまう可能性もありますが、納得いくまで何度も繰り返すゼミと各自の積極的な考え方・取り組み方によって、広くとも深くすることが可能であると考えています。

例えば、2006年度の卒業研究のテーマをいくつかご紹介すると、卒業論文では、これからむかえる超高齢化社会において、本当に必要なバリアフリーや高機能設備とはどのようなものなのかについて、多角的な視点から調査分析をおこなった「住宅のバリアフリー化・高機能設備化に対する意識調査 —ユーザー・メーカー・研究者の三者の視点から—」や実物大の実験空間を制作し、ステンドグラスから透過する色光の印象評価を実験的に分析した「素材の違いによる透過色が与える心理的影響に関する実験的研究 —ステンドグラスの可能性—」、卒業設計・制作では、日常どこにでも生成されている痕跡の生成過程をピクトグラム化し、その生成過程を設計のポイントとした「redevelop & produce —痕跡をモチーフにした空間デザイン—」やアクリルの素材特性と照明との組み合わせを検証し、色えんぴつの収納方法に転用した「Abbellire Abbinare —魅せる色えんぴつ立て—」といったように多岐にわたるテーマで卒業研究に取り組みました。

【体感すること】

橋本雅好研究室の活動のひとつとして、様々なプロダクト、インテリア、建築、都市などを実際に体感しています。現在はインターネットやデザイン系雑誌によって様々な情報が簡単に手に入りますが、モノを創るときには、画像情報だけではなく、モノ自体のさわり心地や重さの感覚、その場で感じる雰囲気や違和感、匂い、音、光など様々な情報がモノを創る際の重要なエッセンスとなります。そのため、橋本雅好研究室では、様々な場所にばらまかれているエッセンスを得るためにできる限り体感したいと考えています。

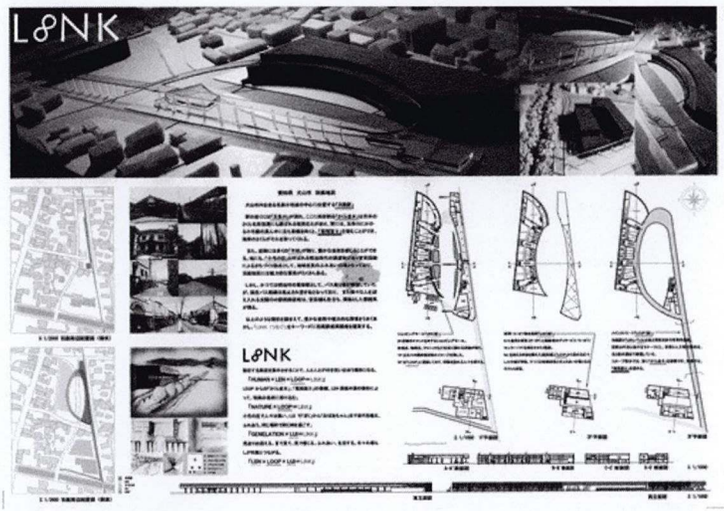

ゼミの風景


実物大の実験空間での印象評価実験


卒業展：橋本雅好研究室の展示風景



ゼミ合宿やゼミ旅行での一コマ



犬山市長賞 日本建築学会創立 120 周年記念東海支部事業「美しくまちをつくる」まちづくり提案コンペ

直島、金沢 21 世紀美術館、六本木や表参道といった話題の場所だけでなく、寂れた地区の様子や歴史的建造物の保存状況などを体感したり、実際にモノ創りを体感したり、様々なデザイナーの展覧会、様々な学会の研究会・講演会なども体感しています。

【やってみること】

橋本雅好研究室の活動のもうひとつとして、プロダクト、インテリア、建築、都市など様々なジャンルのコンペに積極的に取り組んでいます。卒業設計・制作へ向けての予行練習という意味合いがありますが、共同作業による責任感や結束力を培うことも期待しています。なかなか入選することは難しいですが、2006 年度は日本建築学会創立 120 周年記念東海支部事業「美しくまちをつくる」まちづくり提案コンペにおいて犬山市長賞を受賞することができました。当時の 4 年生 2 人との共同で犬山市の現地調査から始まり、打ち合わせを毎日のように繰り返し、大学に籠もりながら CAD や模型制作に没頭し、夏休みの約 1 ヶ月間をかけて完成させました。完成した際には 2 人とも充実感を口にしていましたが、入賞の連絡を受けたときのうれしそうな表情や言葉は、その後の卒業研究への取り組みにしっかりと反映していたと思います。

また、東海地区では、様々な学会が研究を発表しあう場（日本色彩学会東海支部東海ヤングセミナーなど）や卒業設計を競いあう場（東海地区合同卒業設計講評会など）があり、橋本雅好研究室からもチャレンジしています。他大学との交流や競い合いから得た経験は、とても貴重なものになったと思います。

【これからのこと】

何事も「体感すること」「やってみること」から始まるので、これからの橋本雅好研究室の活動は、どうなっていくかは未定ですが、今現在一番熱いのが、ヘアーサロンのウィンドウディスプレイ計画があり、名古屋市内にあるヘアーサロンの協力を得て、店舗イメージを表現したウィンドウディスプレイをデザインする予定です。「体感すること」「やってみること」を同時におこなえるまたとない機会を得たので、現在、実地調査をおこない、プレゼンなどの準備作業に取りかかっている状況です。

最後に、橋本雅好個人は、工業デザイン学科でプロダクト、インテリア、環境デザインを学び、建築学専攻で建築を学びました。その中で研究としては、人間の心理・行動とモノ（カタチ、オオキサ、デザイン）との関連性を多様な視点から分析することを試みてきました。今回、研究の風景を執筆している中で、橋本雅好研究室の方向性を考えてみると、自身の勉学の道がそのまま出ているということを認識しました。橋本雅好らしいという意味ではいいですが、広く浅くの危険性が潜んでいるということにもなります。そうならないように、何事も「体感すること」「やってみること」をモットーに、これまで出会った方々と蓄積した経験を生かし、これから出会う学生たちと「広くとも深い」研究ができるように、納得いくまで努力する研究室として活動していきたいと考えています。



日本色彩学会東海支部東海ヤングセミナーでの発表風景



ヘアーサロンの実地調査



椙山女学園大学 生活環境デザイン学科 講師 橋本雅好

まち　建築　ひと

gallery

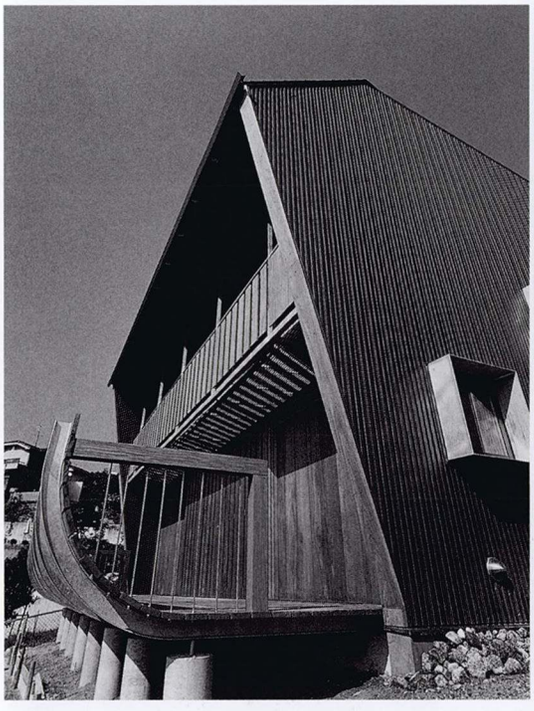
平群の家

設計

栁本 重明 Yanamoto Shigeaki

この家のエントランスは、内径φ2400のヒューム管が潜り奥に無垢の一枚板のブビンガ材の玄関ドアが構えている。重量はそれぞれ 8 tonと140kg。この質量感がエントランスを昇華させている。
ガルバリウムの多面体のフォルムの中心に、吹抜けをもつリビングを配置。その前には、J型に曲げ加工したH鋼にイペ材を張ったデッキテラスが室内とバリアフリーで連続している。 2 階には吹抜けに面して寝室、子供部屋を配置。これらの部屋は建具の開閉によりリビングと一体空間となり、 4 人家族の自然なつながりをつくっている。







栁本重明（やなもとしげあき）
1966　和歌山県生まれ
1989　近畿大学理工学部建築学科卒
　　出江寛建築事務所
1994　Y's建築工房設立

撮影：河合止揚
企画編集：倉渕奈千子（作品作風小委員会）

特集

あそび考

「あそび」―遊び、遊戯、エンタテインメント、ゆとり、隙間…。「あそび」は実に様々な意味を持っています。競争社会では「あそぶ」を肯定的に捉え難いようにも思えますが、実は「あそび」こそが無味乾燥になりがちなわれわれの生活や社会を豊かで深みのあるものにする役割を担ってきたのではないでしょうか。

「あそび」という切り口から今日のまちや社会を眺めることで、われわれが見失いつつあるものが浮かび上がるのかもしれません。

また、変動していくこの先においてわれわれの「あそび」方はどうなるのでしょうか。まじめに「あそん」でいる人たちや事例を紹介しながら、真剣に「あそび」を考えたいと思います。

計画系分科会幹事●三宅次郎

総論1●人・まちと「あそび」の関係を考える

「富裕層」「シニア層」のライフスタイルにみる“あそび”●竹内　奉正

あそびがひとの暮らしに与えるもの●吉田　一平

各論●今の「あそび」を読み取る

関西人の遊び場―全国に発信する甲子園文化―●玉置　通夫

禁止事項のない遊び場づくりでめざすもの●大村　虔一

コミュニティカフェの試み●平田　オリザ

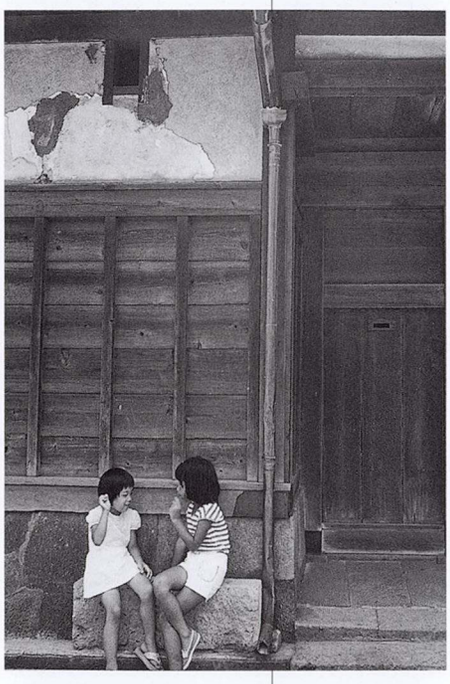
遊びを生みだす出会いと発見―チンパンジーの遊びと環境―●松阪　崇久

都市（マチ）にあそぶ●李　有師

あそび心が作品をつくる〈インタビュー〉●露の都

総論2●これからの「あそび」

これからの日本を豊かにするための「あそび」考―“禁じられた遊び”の国、日本を解放しよう―●木津川　計



本特集企画担当編集委員

飯田　匡／鈴木克彦／田中直人／高橋和也／辻　武之／紅谷昇平／松田奈緒子／三宅次郎／守井　辰／吉村英祐

総論1-1

人・まちと「あそび」の関係を考える

「富裕層」「シニア層」のライフスタイルにみる“あそび”

竹内奉正

今、まさに日本は歴史上かつてない大きな転換期を迎えている。戦後の日本人は、ずっと物質主義を幸せのシンボルとして信奉してきた。その行き着いた先が、株価や地価に一喜一憂するバブル経済だった。それが崩壊し、世の中が勝ち組みと負け組みに分かれると、大人も子供もこころが荒んでしまったようだ。一方、1980年代後半からあれよあれよという間にIT＆通信革命が世界を一つの経済市場に変え、グローバル化の進展を促進してしてきた。

そんな中で、人口数と人口構造変化＜少子・高齢＆人口減少＞と社会階層変化＜格差社会＞という２つの変化が、同時に生じてきている。

65歳以上の人が全人口に占める割合を「高齢化率」といい、それが20％を超えると「超高齢社会」になる。我が国は2005年に20.3％になり、まさに高齢者が約2500万人と世界一の「超高齢社会国」になった。しかも、2007年から「団塊の世代（約300万人）」が定年を迎える。生産人口が減り、“あそぶ”人たちがどっと誕生すると予測されている。

■富裕層大国の日本 “あそびの質”が変わる日本？■

住居を除く金融資産が100万米ドルを超える世界の富裕層は2005年末で870万人（メリルリンチ証券調べ、05年末、33兆３千億米ドル世界の金融資産）。そのうち日本人だけで141万人おり、290万人のアメリカに次ぐ富裕層大国第２位にランクされている。一方、野村総合研究所の調べによると（**図１**）、日本の金融資産1400兆円のうち金融純資産

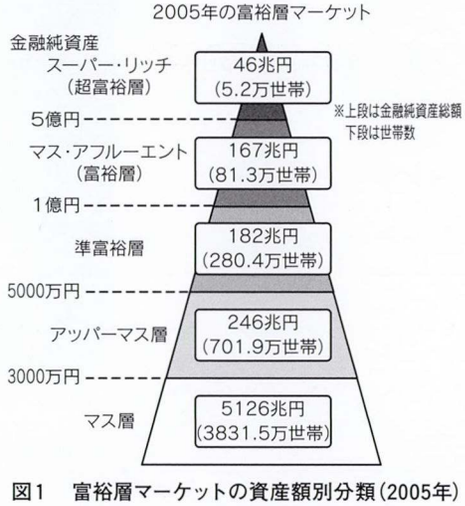


図１　富裕層マーケットの資産額別分類（2005年）

１億円以上の所帯86,5万（1.8％）、213兆円（19.5％）であることが示されている。また、上位約20％の所帯で60％の金融純資産を保有していることがわかる。ここ10年間で、不動産や代々の資産家のオールドリッチだけでなく、ITや通信を使って起業＆上場に成功してお金を手にしたニューリッチ層が急速に増大している。ニューリッチの出現・増大は、日本の“あそび”の質を変えていくだろう。

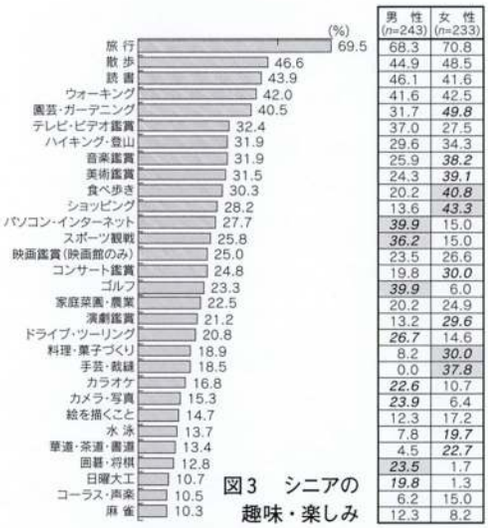
■“あそび”とは 「暮らしの楽しみ・楽しみ方」■

シニアにみる“あそび”の意味・イメージを「ナルクシニアライフレポート」のシニア調査結果からみてみると、回答の多い順に①楽しい、楽しむ②気分転換・リフレッシュ・ストレス解消③旅行、温泉④リラックス、癒し⑤趣味、自分の好きなこと⑥友人とすごす⑦外出全般、街歩きする⑧ゆとり、余裕、のんびり⑨息抜き、ココロの栄養、豊かさとなっている（**図２**）。

①楽しい、楽しむ（み）	103人
②気分転換・リフレッシュ・ストレス解消	77
③旅行、温泉	44
④リラックス、癒し	38
⑤趣味、自分の好きなこと	33
⑥友人とすごす	31
⑦外出全般、街歩きする	25
⑧ゆとり、余裕、のんびり	20
⑨息抜き、ココロの栄養、豊かさ	20

図２　遊びということばから連想するイメージ（*N*=470）

「旅行」「温泉」「友人」等以外、「楽しい」とか、「気分転換」「リラックス」「癒し」「ゆとり」など＜こころ＞にかかわる言葉が多数を占めている。類似した言葉で「レジャー」「リクリエーション」「余暇」などあるが、それらは「仕事・勉強等をするため」の休養・娯楽・癒しというニュアンスが強い。シニア調査対象者に定年後の人たちが多かったからか、仕事のない生活になると純粋に「心の癒しや、楽しむこと」が遊びの意味・イメージになり、その遊ぶ道具として友達、旅行、温泉等のイメージが強く出てくる（**図３**）。また、同様に「PLAY」を広辞苑からみてみると、①遊ぶこと、遊び②演劇、戯曲③演技・演奏④競技と、「仕事の対語」ではなく、具体的な遊ぶ内容が示されている。このあたりに英語圏に比べ日本人の“あそび”に対する意味・



男性 (n=243)	女性 (n=233)
68.3	70.8
44.9	48.5
46.1	41.6
41.6	42.5
31.7	***49.8***
37.0	27.5
29.6	34.3
25.9	***38.2***
24.3	***39.1***
20.2	***40.8***
13.6	***43.3***
39.9	15.0
36.2	15.0
23.5	26.6
19.8	***30.0***
39.9	6.0
20.2	24.9
13.2	***29.6***
26.7	14.6
8.2	***30.0***
0.0	***37.8***
22.6	10.7
23.9	6.4
12.3	17.2
7.8	***19.7***
4.5	***22.7***
23.5	1.7
19.8	1.3
6.2	15.0
12.3	8.2

図3　シニアの趣味・楽しみ

出典：図2～4は「ナルクシニアライフレポート」

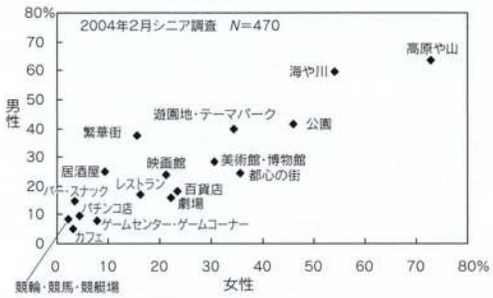


図4　遊びに行こうというときにイメージする場所

イメージの特徴が出ている。

さて、「遊びに行こう」というときにイメージする「場所」とは？　挙名数の多い順にみてみると、①高原や山②海や川③公園等、「自然・自然に近いもの」が上位にくる。次に遊園地・テーマパーク・美術館・博物館・映画館・繁華街や都心の街など「人工的・都市のインフラ」等が挙がってくる（図4）。

■富裕層の“あそび”の実態■

日本の富裕層は大きく2つに分類できる。①代々の資産を引き継いで出来た富裕層「オールドリッチ」と②急速に増えてきた「ニューリッチ層」。それは、企業内で成功して大きな退職金を得た人、退職金にストックオプションを行使して利益を上げた人、デイレートで億単位のお金を手にした人、起業に成功した人、その起業をサポートした弁護士・会計士あるいは医者などの専門職業の人、芸能人・スポーツ選手、メディアの人気にのって成功したセレブな人たちなどである。

●今後、積極的に取り組んでいきたい分野

図5、6より、富裕層は衣・食・住等生活基盤についての満足度は高い。一方、レジャー・余暇生活や文化・心の豊かさについては満足していないことがわかる。日本の富裕層は「お金はあっても、時間のゆとりがなく、遊ぶことや生活を楽しむこと」にはまだまだが現状のようである。

●今後、富裕層が時間やお金をかけたいこと

世界の富裕層のニーズ分野は、主に次の5つである。①資産防衛②教育③エンターティンメント④アンチエイジング⑤セキュリティ。

富裕層向けのサービスには、プライベートバンキング、ラグジャリーカー、プライベートジエット、豪華客船クルーズ、クレジットカード（ブラックカード）、コンシシエルジュ・サービス、高級マンション・豪邸・別荘、ラグジュアリーウオッチ、高級食品・高級レストラン、高級スーパー・ショップ、海外移住等がある。日本の富裕層のラグジュアリー消費等の実態を調査結果からみると、図7に示すとおりである

●富裕層のライフスタイルは、やがて大衆のものとなる

「富裕層マーケティング」は、時代の先取り。富裕層が望んでることを知ることで、次の時代の商品やサービスの発見や開発ができる。富裕層の人々だけのライフスタイルも、やがてそれは大衆のライフスタイルとなる。日本の大衆は日本の富裕層のライフスタイルを求め、日本の富裕層は世界の富裕層のライフスタイルを求める。これをますます加速させるのが「グローバリゼーション」である。

■「本当に豊かな国」への戦略■

日本は、「富裕層インフラ貧国」であり、「富裕層サービス貧国」である。

メリルリンチ証券が発表しているように、日本は今のところアジアでNo.1の「富裕層大国」である。しかし、世界の富裕層たちが集まるようなスポットが、日本には1か所もないのはどうしたことだろう。上海やドゥバイなどにも負けている。世界の人が集まる最高級のリゾート、交流できるイベント（映画祭やゴルフツアー・競馬・F1等）やラグジュアリーホテル建設、プライベートジエットやクルーザーで来れる港・インフラ等がパッケージとなって整備されていくことが「本当の豊かな国づくり」だろう。

①食生活	80.3%	⑦仕事・ビジネス	55.8%
②経済的ゆとり	78.8	⑧自己実現	54.9
③家族・家庭	73.2	⑨レジャー・余暇生活	52.6
④衣生活	72.8	⑩精神的ゆとり	43.1
⑤住生活	72.5	⑪文化的ゆとり	40.7
⑥人との付き合い	61.8	⑫時間的ゆとり	40.1

図5　生活満足度（満足+やや満足）の値（N=661）

①遊（レジャー・旅行・遊び・趣味）	57.6%
②健（健康づくり・健康によいものなど）	40.4
③食（食事・グルメ・料理・食べ歩き）	36.3
④運（運動・スポーツ・体力づくり）	34.6
⑤知（習い事・学習・研究・芸術・文化）	33.4
⑥交（人との交流・コミュニケーション）	28.4
⑦美（美容・フアッション・おしゃれ）	24.1
⑧住（インテリア・リフォーム・日曜大工）	19.1
⑨心（精神修養・信仰）	12.4
⑩働（労働・仕事）	11.2

図6　今後積極的に取り組みたい分野（N=661）

<ラグジュアリー消費>	
①フアッション	22.8%
②自動車	15.7
③インテリア	13.8
④高級腕時計	12.6
⑤家具	10.7
⑥別荘	10.4
⑦ブランド品	10.1
⑧ワイン	8.5

<レジャー>	
①海外旅行	49.0%
②国内旅行	35.6
③温泉めぐり	27.7
④高級レストラン・料亭での食事	23.4
⑤クルーズ旅行	14.1
⑥海外ロングスティ	11.0
⑦世界一周旅行	10.0

<趣味・娯楽>	
①読書	25.9%
②映画	19.4
③コンサート	17.5
④美術鑑賞	13.0
⑤料理	13.0
⑤ガーデニング	13.0

<美・健康>	
①マッサージ	14.4%
②エステ	11.8
③アンチエイジング	11.5

<スポーツ>	
①ゴルフ	21.0%
②ジム・フイットネス	12.4

<その他>	
①子供の教育	11.5%
②資産防衛	10.9

図7　今後時間や金をかけたいこと（N=661）　出典：図5～7は「富裕層ライフスタイル調査」

※参考資料「ニューリッチの世界」臼井宥文著

※「富裕層ライフスタイル調査」は下記3社の共同調査
・調査総合プロデュース：株式会社カルチャースタディーズ研究所　三浦展
・調査実施主体：株式会社イー・マーケティング
・調査集計・分析：株式会社プラン・ドゥ

※日本の「富裕層」の特徴

上記「富裕層ライフスタイル調査」にみる対象者のプロフィールは、年齢は「40代」「50代」で70%、所帯年収は「5000万円～7000万円未満」が最多で3割、平均で9532万円。金融純資産では1～3億円未満が4割と最多、平均4億6897万円、総資産額平均9億9597万円の人たちである。

（たけうち　ともまさ　株式会社プラン・ドゥ代表取締役）

総論1-2

人・まちと「あそび」の関係を考える

あそびがひとの暮らしに与えるもの

吉田一平



混ざって暮らす

■江戸時代と近代■

東京オリンピックまで、畑の肥料は自宅や隣町からでる下肥や風呂の排水だった。食べるものは冷蔵庫がまだないため、旬の野菜ばかり。味噌、しょうゆ、豆腐は自家製。食卓、机はなく膳箱。燃料は薪や藁。出た灰も肥料。電気製品といえばテレビだけ。アイロンがないので木綿のズボンは寝おしすればいいが、シャツはしわくちゃ。耕運機はもちろん車もない。道路はがたがたの地道ばかり。今流で言えばその当時、究極のエコ社会だった。

昭和21年早生まれ。幼稚園も保育園もなく田んぼや雑木林の中でひたすら遊び、小中高時代は、4人の兄姉が夭折したため、末っ子の私は生きていさえすればいいとのんびりしたものだった。

江戸時代のような暮らしと農業が嫌で、豊かな暮らしを求めて名古屋の会社に勤めた。当時の会社は電卓もファックスもなく、市外通話は電話局呼び出し。そして、そろばんとペン、インクと訂正印は必需品。時間イコールコストのモーレツの時代の幕開けに入社し、それから時間に追われるサラリーマン生活を15年。ゴルフ、麻雀、お酒と商社マンの「資格」は一通り。その間に電卓、ファックス、プッシュホンから大型電算機と言われるものまで出現し、新幹線で日帰り出張もあたりまえになり、会社も超近代的に様変わりした。

江戸時代の風景そのままだったわがまちも、昭和50年を境にして一変しはじめる。山を削り田んぼを埋め立て、区画整理事業がはじまったのだ。

昭和39年から昭和54年の15年間、耕運機も車も電気製品も手に入れることができ、食べたことのないような食事もでき、暑さ寒さやあらゆることがボタン一つで自由に調整できるようになった。目の前の雑木林が消えるのを見て、「これで蛇もムカデもいなくなりやっと都会になる。ようやく誰もが願っていた便利で豊かな暮らしになる」と思った。

でも会社を辞めてもう一度このまちを見渡し、暮らしを振り返ってみると、ふるさとは消えかかっていた。

■雑木林のなかの幼稚園■

目の前から消えようとしているふるさとの暮らしと雑木林を残そうと思い立った。

大人が仕事で追い立てられてきたのはわかるが、子どもたちまでもが何かにせきたてられるように暮らしている情景をみて、なぜかつらくなった。どうしたらいいのかと。

いま自分はどんな場を子どもたちにつくってやったらいいのか、子どもたちは大人ではないのに今のままでいいのか、大人たちは子どもたちに何を求めているのか、こんなに便利で豊かになったのにこれ以上何を求めるのか、一体幸せって何なのか。

「雑木林のなかに将来のことなど心配せずにひたすら遊ぶことのできる幼稚園をつくってみたい。5歳までに死んでしまうかもしれない子どもたちが、生きているのがこんなにも面白いのかと感じてくれる幼稚園にしたい。誰も来なくてもいいから」。

何も知らないサラリーマンが夢のようなことを考えた。

会社に行くための幼稚園にしない
木を残すため山を削らない
隠れて思いっきり遊べるようにする
自然を相手に一日を暮らす
時間に追われないようにする
遊具を置かない
農耕民族的行事をする
でんでんむしを一日見ていてもいい
雨降り以外は外で遊ぶ
一人ひとりを比較評価しない
子どもたちの目が輝いていればそれでいい
自然がついているから心配ない

そしてモーレツ時代のサラリーマンが、雑木林のなかで朝から晩までひたすら遊ぶ子どもたちとゆっくり暮らしていると、思ってもいなかったようなことを考えるようになった。

やっと生まれてきた子どもたちをなぜ大人たちのように急がせねばならないのか？　無心に遊ぶ子どもたちに何ひとつ優劣なんかないのになぜ、何を競わせるのか。この子たちも私たちも必ず死んでいくのに、なぜ生まれてくるのか？

雑木林の自然の営みの不思議さ、目の前の子どもたちの命のすごさに魂を揺さぶられ

た。梁塵秘抄にそういう気持ちをうたったものがあり、感動したことを覚えている。

遊びをせんとや生まれけむ
　戯れせんとや生まれけん
　　遊ぶ子どもの声聞けば
　　　わが身さへこそゆるがるれ

幼子たちは今だけをひたすら楽しむことができる。

幼子たちは遠回りのほうが楽しいようだ。

幼子たちは感性だけで物事を見ている。

幼子たちは一人ひとりみんなちがう。

幼子たちはまさしくかけがえのないもの。

幼子たちは自然とおなじで人間の思うようにはならないそのもの。

幼子たちはじっとしてないけど忙しくはない。

■時間に追われない人■

子どもたちをみていて、こんなことを考えた。ゴジカラ村にやってくる大人たちがいつも非難しているガタガタ道を、子どもたちは目を輝かせて通っている。雨上がりのぬかるみには歩くことすら忘れてしまい、遊びに夢中になっている。おんなじ道なのに。

大人と子どもは人種が異なるのだろうか。でも大人でもよく観察をしているとゆっくりやってきたときには嬉しそうにしている。お年寄りはいつもそうだ。

そうしてみると世の中には正反対の価値観を持つ人間がいる。大人と子ども？　男と女？　年齢によって？

そこで「時間に追われる人」と「時間に追われない人」に分けてみると、そのあたりのことが理解できた。四半世紀のあいだ幼子やお年寄りと暮らしてきて、なるほどと思う。あらゆることに価値観は180度ちがう。だから文化も正反対である、ということは、もはやちがう国の人かもしれない。

■そこでゴジカラ村■

ゴジカラ村は、雑木林を暮らしの座標軸としている。雑木林は「さまざまなものがさまざまなありようで暮らしている」「いつも未完成」である。雑木林のなかには幼稚園や介護、看護の専門学校そして託児所や老人福祉施設、まちのなかにも幼稚園や託児所、グループホームそしてOLと老人が一緒にすむぼちぼち長屋などがある。いたるところに露天風呂や生ビールがあり、築200年の３棟の古民家には、あらゆる人たちが夜となく昼となく集っている。ゴジカラ村には総勢1200人ほどが暮らしている。どこもかしこも混ざって暮らす。村の風景も運営も「雑」「おおらか」を大事にしている。最近ではリタイヤした人たちが大勢ゴジカラ村で、昔取った杵柄をシェアリングしながら、あちらの国からこちらの国へ移る練習をしている。ゴジカラ村総人口の７割が時間に追われない国の人である。

時間に追われる国の教育を受けてきた人たちは、自分の価値観から抜け出るにはずいぶん時間がかかる。

時間に追われる国のような合目的集団では、仕事の場であるから同じ能力の人ばかり集められる。だから異質のひとは矯正されるか、排除される。今の教育は追われる国へ行くためのものであり、身につけたその価値観は仕事の場だけに通用するものであるのに、家庭や地域にまで持ち込んでしまっている。だれひとり不思議に思っていない。おかげで時間に追われない国の主人公であるお年寄りや子どもたち、そしてリタイヤした人たちの居場所がない。

時間に追われる国の人が過半数を割ったことを、ほとんどの人はまだ知らない。主役は替わり、価値観も正反対になり、言葉を換えていえば国は変わってしまったのである。頭の切り替えに少し時間がかかるが、いわゆる団塊の世代も追われない国に入国してくる。企業、軍隊、病院、学校などは時間に追われる国の人たちに任せておけばいい。

時間に追われない国の人たちが７割を超えるゴジカラ村は、不便で手間隙がかかって、わずらわしくて思うようにならないところ。昨年開所したゴジカラ村役場kkは冷たい行政にしたいと思う。

不便であれば時間がかかり、手間隙かかれば大勢が参加でき、大勢が参加すればわずらわしくてもめるし、思うようにはならない。でもどんな人にも立つ瀬ができる。役割と居場所が生まれる。

■遊びは社会を変える■

都合のいいことばかり求めたら、思ってもみない悪いこと（いじめ、虐待、親殺し、子殺し）がついてきてしまったこの40年。時間に追われない国の価値観を見直してもいいのではと思う。時間に追われる国の価値観は、お金を稼いだり、企業が競争したり、いい点数をとったりする時だけに使うもの。

一方、生きていくことや暮らしていくことには追われない国の価値観を使う時がきた。家庭や地域全体がそうなれば、誰にとっても生きていくことが楽になる。子育てのことも認知症のことも、心配することも少なくなる。

特に雑木林のように混ざって暮らすと、いろいろな人に立つ瀬ができる。子どもにもお年寄りにも、認知症であっても、生きるのが不安な人にとっても…。時間に追われる人たちは、いろいろな人と混ざって暮らすことは苦手だろうが「おおらか」をキーワードとするといいだろう。時間に追われない国、いずれ行かねばならない国だから、今から学習してみてはどうだろうか。

遊びとは「おおらか」なものである。

（よしだ　かずひら　社会福祉法人愛知たいようの杜　ゴジカラ村代表）

遊びをせんとや生まれけむ　戯れせんとや生まれけん
私たちがすんでいる社会は　大変合理的で便利ですが、
時間に追われ結果を急いで、子どものときにもっていた
“遊ぶ”というこころをわすれてしまったのではないでしょうか
どんな人にもどんなちいさな虫や草にでも　自然のなかでは役割や居場所が
あるはずなのに、気がつかなくなっているようです。
愛知たいようの杜では、あらゆるものの存在、あらゆるものの訪れを大切にして、
もっとゆっくりした暮らしをとりもどし
そのなかで、お年寄りの方たちが「生まれてきてよかった」
とおもえるようなところにしたいと考えています。
この杜を訪れそのなかで暮らすお年寄りに触れ合うとき、
何か大切なものを発見できるのではないでしょうか。

昭和62年４月
愛知たいようの杜 設立の想い

各論 1

今の「あそび」を読み取る

関西人の遊び場

—全国に発信する甲子園文化—

玉置通夫



金曜日。この日試合のない甲子園球場に人影はなく、外壁に張りめぐらしたツタ模様のメッシュシートが風に揺らいでいた

政治や経済、文化と、東京への極端な一極集中が続いているが、逆に、東京にはなくて関西にしかないものだって、あって良いのではないか。その象徴的なものが京都や奈良の文化的遺産であり、阪神甲子園球場だと思う。

ある時、こんな質問を受けたことがある。「どうして高校野球は甲子園球場でやるのか。東京ドームや神宮球場でもやれるじゃないか」。すかさず、私は反論した。「高校野球は、甲子園でやることになっているからさ」。それは、歴史的な経緯をたどれば至極当然のことなのだ。そもそも甲子園球場は、高校野球（当時は中等野球）を中心としたスポーツ施設として建設されたものだからである。

一極集中という点では、スポーツの世界も他の分野と同様だ。アマチュアスポーツ団体の総本山である日本体育協会、高校スポーツの元締めとも言うべき全国高等学校体育連盟は、そろって東京にある。そんな中、日本高等学校野球連盟（日本高野連）の本部は、大阪市西区江戸堀にある。毎年、春と夏の大会が甲子園球場であり、高校野球関係の会合などは日本高野連で行われる。とくに春夏の大会の際、全国の注目が甲子園に集まると言っても良い。しいて言えば、それは、数少ないとは言え、関西が注目を浴びる誇らしい時間でもあるのだ。

■甲子園球場の誕生■

甲子園球場は、1924（大正13）年８月１日に誕生した。その“来し方”は、日本の近代化の流れでもあり、大衆社会の変遷や戦争といった社会の潮流を体現してきた「時代の証人」でもある。一つの建物にしかすぎない甲子園という球場が、ことさら存在感のある施設として人々の印象に残るのは、時代を見続けてきた一貫性にあるのではないか。集まり散じて人は代われども、常に凛として建つ甲子園球場に対する思い出は全国に広がり、時代を共感する有力な手段にもなっていると思う。

そもそも、甲子園球場は、野球場だけに限定して建設されたものではない。総合的な体育施設として、広く国民に利用されることを目的として開場した。その背景には、球場建設を発表した阪神電鉄の三崎省三専務の思いがあったからだ。当時の阪神電鉄には社長が不在で、専務が会社を取りしきっていた。三崎専務は、実質的には社長職にあったのである。その三崎氏には、米国留学中の悔しい体験があった。それは、体格の良い大男揃いの同級生の中で、日本人の体格が劣ることを絶えず痛感させられたからだ。「これからは、体力を増強しなければ世界に伍していけない」という思いが強く、それが帰国して阪神電鉄に入社してからも、頭にこびりついていた。そこで、資本金の６分の１という高価な兵庫県の河川敷払い下げ事業に飛びつき、大球場建設への思いを実現させたのだ。

甲子園球場は、当初は「阪神甲子園運動場」という呼称だった。野球だけではなく、ラグビーやサッカー、陸上競技も出来るような広大なグラウンド。開場式で、三崎専務は「いま、私たちはアメリカのどこにも負けない立派な大運動場を持つことが出来ました。私は、ここを日本のスポーツのメッカにしたいと思っております」と声を弾ませた。その表情には、国民の体力増強という種々の思いを実現させるきっかけをつかんだ喜びにあふれていた、と伝えられている。

■水洗便所とカレーライスに一喜一憂■

ここで忘れてならないのは、大運動場が単なる運動場ではなく、時代の先端を行くモダンな施設、珍しい建物だったという事実だ。というのも、こけら落としの第10回全国中等学校優勝野球大会〈現在の夏の高校野球の前身〉は８月13日から始まったが、大会４日目には早くも満員の大盛況となったからだ。以後、連日押しかける観客で、球場内は大混乱になったと当時の新聞は伝えている。それは、野球以上に、大運動場見たさの客が詰めかけたということであり、新しい風俗として注目を集めていたことを裏付けている。

京阪神の人たちは、とにかく運動場の中に入って、新しい設備を見ることが土産話になったという。その最大の目新しい施設は、水洗便所だった。現在のように各家庭に水洗トイレが普及していればともかく、大正末期には、個人の家で水洗トイレを設置しているのはほとんどなく、非常に珍しいものであったことは間違いない。

第10回大会に出場した広島商の選手の一人が、試合中、気分が悪くなり、トイレへ行き、用を足した。しかし初めてみる水洗式で、どうやって水を流すのかがわからない。やむをえず、前にあったクサリを引っ張ったところ、突然水が勢いよく流れ出した。びっくりした選手はベンチに戻り、引率の先生に「便所を壊してしまいました」。今度は先生が驚き、球場職員に「申し訳ありません。生徒が便所を壊してしまいました」。その選手はもちろん、先生も水洗トイレなどというものを見たこともなかったための逸話だ。

もうひとつ、観客の間で評判になったのは、食堂だった。そこで出すカレーライスとコーヒーは、なんともモダンな洋食だった。当時、カレーライスは、オムライスなどとともに洋食屋で食べるものだった。このため、カレーライスが球場で食べられるのは魅力で、すぐに話題となった。さらに、コーヒーが飲めたのも、目新しかった。現在のように街中に喫茶店があふれている時代ではない。コーヒーは珍しい飲み物だったし、ちょっと西洋通を装うことも出来る小道具だった。

水洗トイレとカレーライス、コーヒーは、斬新な風俗だった。このため、野球を見ず、カレーライスを食べてトイレを使い、そのまま帰る人も、意外に多かったという。「甲子園へ行ったか」というのが、京阪神の人たちの合言葉になったというウソのような話まで語り伝えられている。また、余談になるが、甲子園大運動場の食堂でカレーライスが名物になっていると聞いて、すぐに反応したのが、阪神電鉄のライバル社である阪急電鉄の小林一三社長だった。阪神にライバル心をむき出しにした小林社長は、大阪駅前のターミナルに百貨店をつくる構想をたて、1929(昭和4)年に開業させた。大食堂の目玉メニューは、なんとカレーライスだった。甲子園人気を借用した商才は見事に当たり、「阪急百貨店のカレーライス」として人気を博した。しかし、甲子園でのカレーライス人気も根強く、結局、現在にまで引き継がれ、甲子園の代名詞と言われるまでに定着してしまった。

■「甲子園文化」を育む■

甲子園球場は、昭和に入ると体育施設場としての体裁を次々に整えていく。1929(昭和4)年には一、三塁側の内野席に鉄筋50段のアルプススタンドが出来、1932(昭和7)年には三塁側アルプススタンドの下に室内温水プール、一塁側の下には室内体育館が完成した。

このプールを設計したのは、大阪毎日新聞社(現毎日新聞大阪本社)事業部嘱託で工学博士の中尾保氏。球場長でパリ五輪(1924年)に水泳選手として出場した経験を持つ石田恒信氏とともに専門書と首っぴきで作った。午後1時から5時までが一般公開、同6時から10時までは会員制で運営された。温水用には重油を使い、泳ぎやすいプールとして定評があった。戦時色が濃くなった1943(昭和18)年までの10年余り、全日本級の選手たちの強化合宿も行われ、水泳ニッポンの一翼を担う役割を果たした。戦時中は海軍の軍事研究施設となったが、戦後は進駐軍によって再びプールとして利用された。しかし、進駐軍撤退後はフタをしたまま放置され、現在は、その上で打撃練習が行われている。

室内体育館では、バスケットボールやフェンシング、柔道や剣道などが行われた。体育館が十分に普及していなかった時代だけに、関西の各種学生リーグの会場にもなり、ここで試合をした思い出を持つ人たちも多い。この体育館は戦後、土を入れて文字通りの室内雨天練習場となり、今では、春夏の高校野球の際、試合前の練習場として利用されている。

このほか、馬術大会やスキーのジャンプ大会といった変わったスポーツ大会も催され、スポーツのメッカとしての名声が積み重なっていった。さらに野外歌舞伎や映画会、戦時中は戦車の博覧会場にもなり、文化的な場所としても、多くの人たちの思い出を醸成させていった。このような総合的な役割を果たす場所として機能してきたことは、言い換えれば、「甲子園文化」とも言えるものを育んできた歴史そのものでもある。もはや甲子園は、完全に文化施設になっている。それが、甲子園の持つ独特のムードにも結びついている。

■甲子園に吹く風■

甲子園球場は、戦前は外野スタンドの鉄筋コンクリート化や一、三塁側のアルプススタンドを覆う屋根の建設などがあり、戦後は戦災による被害からの復興もあり、施設を充実させてきた。

阪神電鉄は今秋から3カ年計画で改修に乗り出す。82年ぶりの大改修であり、新しい時代に生き続けるためには避けて通れない補強手術でもある。名物だった外壁のツタは刈り取られ、再生植樹されるが、本来の水ハケの良さを利して往時の見事さを再現できるかどうかは未知の部分でもある。

しかし、創建当時からのコンクリート壁は、微動もしない強さを誇る。甲子園のコンクリートは、まだ50年ぐらいは大丈夫なのではないかと思いたくなる。阪神・淡路大震災の際、甲子園球場の一塁側アルプススタンドの一部が崩れた。しかし、その他の部分はまったく被害を受けなかった。崩れたアルプススタンドは、終戦間近の1945(昭和20)年8月6日の空襲によるもの。粗悪な材料で補強したらしく、その部分が大震災の強い揺れで崩れたことからみても、創建当時のコンクリートがいかに良質だったかを物語っている。やはり、甲子園は頑強なのだ。

改めて、私たちは甲子園球場に感謝をしなければならないだろう。戦火をくぐり抜け、82年にわたる歴史を刻み込んだ「生き様」は、国内無類のものであり、阪神間のモダニズム文化の地下水脈的な役割を果たしてきたと言えよう。この巨大な文化のマグマは、確かに関西という風土に力を与え、全国に情報発信してきた。高校野球という日本独特の文化もそうだし、阪神タイガースという独特の球団も同様だ。やはり甲子園あってのタイガースであるし、またタイガースの存在が、甲子園に重なり合って球史を刻んできたのも事実だ。

いま、国内で、甲子園以上に豊かな気持ちの良い風が吹く球場はないだろう。スタンドに腰を下ろすと不思議に心が落ち着く気がしてならない。ただ、心が静められるだけではない。なぜか子供のころを思い出し、青春時代に思いがめぐる。青く澄んだ陶画のような高貴なイメージが、胸いっぱいに広がっていく。甲子園には、多くの人たちの感情を醗酵させ、純化させたような風が漂っている。それは、人々に遊び心を思い起こさせ、楽しい心を広げていく触媒にもなっていると思う。

(たまき　みちお　毎日新聞編集委員)

各論 2

今の「あそび」を読み取る

禁止事項のない遊び場づくりでめざすもの

大村虔一



水遊び　撮影：関戸基敬

東京・世田谷の経堂で、初めて禁止事項のない遊び場・冒険遊び場が開かれたのは1975年夏である。７月、夏休みとともに開場し、８月末日、夏休み終了をもって運営を停止した。しかしボランティアの学生や近隣の親たち、小学校高学年以上の常連が遊び場に群れていたのは、７月初めから９月いっぱいに及ぶ。夏休み前は、プレーリーダーハウスやパドリングプールその他遊具の手づくりが行われた。９月は手づくりしたものを撤去し、いわゆる原状回復するのに費やされた。用地はこの３カ月間世田谷区から借用したもので、烏山川の暗きょ工事で出来た緑道予定地である。企画が始まり「遊ぼう会」が結成された準備期間は年の始めから。運営停止後も会は維持され、1979年夏「羽根木プレーパーク実行委員会」にバトンタッチするまで、断続的に活動を継続した。

当初、活動母体は全く住民有志によるボランティア活動。参加者が浄財を出し合い、不用品を持ち寄り、近隣の好意にすがって運営された。国際児童年を機に区との協働事業が始まると、公園が利用できる上、いわゆる予算措置が施されて、運営は楽になった。しかしそれ以前の自由な活動を続けたくて、「遊ぼう会」以来の住民の財布を維持し続けた。たとえばイベント時のお楽しみである熾き火での「あそぼうパン」焼きは、口に入るもので、区の予算を使いにくいが、参加者に一コ100円出してもらえば、材料費が出、次回の準備資金を住民の財布にストックできる。

当初の「遊ぼう会」の主力メンバーは、プレーリーダー役の20歳前後の大学生を除けば、当時30代から40代中頃までの子育て最中の親世代。いわゆる団塊の世代のおおむね一回り年上。戦前生まれで、おおむね終戦時に小学生以下の年齢である。学校では戦前の教科書に墨を塗り、戦後の民主主義教育を受けた最初の者だ。この世代は兄弟は４人前後で、食料や物資窮乏のなかで幼年期を過ごし、いつしか自給自足に立脚しつつも知恵と工夫で問題状況を切り開く生活姿勢を身に付けていた。私の子どもは２人で、当時としては平均的な家族数。高度経済成長のおかげで30年前とは比較にならない文化的暮らしに変わり、電気炊飯器、洗濯機、冷蔵庫などマイホームの財産は増える一方だが、娘や息子の暮らしの貧弱さには心を痛めていた。何もなかった戦後の私の方が充実した暮らしを体験していたのではないかと不安を覚えていた。

■「遊ぼう会」からスタート■

私をこの活動に駆り立てたのはレディ・アレンの「都市の遊び場」（大村虔一・璋子訳/1973/鹿島出版会）の写真だ。子どもの頃の楽しさがよみがえってくる素朴な白黒写真。それは、失われかけている子どもの遊びを取り戻すため、世界各地で展開されている地域や行政の取り組みの紹介だった。子どもの暮らし、とりわけ主体的暮らしである遊びが貧しくなったことに気づかないはずはないのに、私のまわりでは有効な手が打たれていない。それに比べて欧米では果敢にいろんな試みがなされている。私は妻と「都市の遊び場」を翻訳出版し、アエロフロートの格安切符を求めて、紹介されていた遊び場を訪ね、たくさんの写真を撮って戻った。

「遊ぼう会」のメンバーは、私の家や近所の小学校、幼稚園でそのスライドを見、子どものために自分も行動しなければと感じた人たちだ。みんな子どもの頃の貧乏は嫌いだが、当時の時代環境のなかで自分たちは結構いい体験をして育ち、その結果今日があると直感的に感じていたのではないか。ほとんど面倒な議論もせず「話し合うだけでなく実践すること。PTA校外班や町会に話を持ちかけると面倒になるから、自分たちボランティアでやること」がすんなり決まった。さらに、その気のある人の品定めが始まり、口コミで仲間が増えていった。

世田谷に住んでいるのに多くのメンバーが地方で育ったことは、活動に父親の参加を得るために当時半ドンだった土曜の夕べを家族ぐるみで遊び場で過ごす企画で、判明した。生ビールを用意し、焼き鳥を焼き、おにぎりを持ち寄り、豚汁でもつくるかという段になって、素材やつくり方に各家で違いがあることが話題になった。親から受け継いだものだったり、地域特性だったりするらしい。面白いので異なる数タイプの豚汁をつくり食べ比べたが、ここで北海道から九州までの出身者がいることが分かったのだ。

高度経済成長以前に子ども時代を地方の都市や農村部で過ごし、高度経済成長の担い手として目いっぱい働き、いつしか親となって、東京の地でわが子を育てなければならない状況。育児に十分な時間を割けない就業環境のなか、行政の子育て支援施策も乏しく、身近に相談できる血縁もいない育児の不安。そんななか、普及したTVに浸りきる子どもを見て気の毒に思うものの、家から出れば交通事故の危険が大きい。やっとできた児童公園は退屈な遊具と禁止事項の立て札ばかりで、子どもはすぐ飽きてしまう上、最近痴漢が出たという近所の噂。そんな状況の中で、心の奥底で、自分は子どものために何が出来るかを模索していたのだろう。

■私が子どものころ■

高度経済成長以前の地方は、農村部はいまだブランド米などの確立前で、農薬被害もなく、小川にはドジョウやフナが泳いでいた。また石油ストーブの普及前で、薪炭林はいまだ現役。農家の納屋には各種の道具が備えられ、農作業を支える手仕事が伝承されていた。子どもたちはそこで大人の働く姿を見、親の目を盗んでは自分の遊び道具づくりにそれを使ったりした。流通革命や大規模なショッピングセンターのなかった時代、地方の小都市は周辺の農村部を含むエリアの商業文化活動の核としての役割を担い、大いに繁盛していたとはいえないかもしれないが、少なくともシャッター通りではなかった。

私は地方都市仙台で育った。当時は郊外だったが、今では仙台駅から地下鉄で5つ目の市街地だ。すぐ傍にある現在の台原森林公園は、当時は泉方面まで続く山林の一部に過ぎなかったが、野ウサギが棲んでいた。姿を見るのは稀だったものの、落ち葉の中にコロコロ乾燥した糞が混じっていてその存在を意識させ、雪の日は特徴ある足跡が残って、私たちは遊びの中でその捕獲を試みたりした。夏の朝夕はヒバ林からせみ時雨が辺りの空気に充満し、近所の田からは蛙の合唱が聞こえた。蛍のシーズンは団扇片手に夜遊びに出る楽しみがあった。

朝、目覚めると、昨日の充実した記憶が今日一日の楽しさを予感させ、飛び起きて朝食も早々に、急いで登校して、始業前に缶ケリで一汗かく。放課後は、当然ながら学習塾に行くことはない。学校で野球をしたり、裏山の基地に行ったり、家で西遊記に夢中になったり、したいことがいつもいっぱいあった。暮らしの中で強いられる我慢も少なからずあったのは事実だが、それを乗り越えられる「楽しい」がたくさんあった。そんな自分たちには当たり前だった子どもの頃の喜びを、自分の子どもにも体験させてやりたかった。

■子どもたちに「ほんとの遊び」を■

昔の話が長くなったが、私たちが遊び場づくりでめざしたものを説明するには、最初の自分らの状況を記すのが最も分かりやすいと考えたのだ。当然ながら30年以上経過する間に、当初私たちが感じていた急激な社会変化による異常状況は、今では一般化している。変化の状況を通して感じていた子どもの状況の異常を認識することはできなくなったはずだが、依然として子どものために、今、何かしなければと感じて、冒険遊び場づくりに参加する人が後を絶たない。

日本冒険遊び場づくり協会に寄せられる情報では、常設のものやイベント的なものを含め、今全国に200を超す冒険遊び場が運営されるまでになった。

私たちがめざすのは、子育てに対する自分の思いを、他人任せにせず、民主的な手段で実現に移し、地域の子育て機能の活性化を図ることである。今日の子どもをめぐる環境は、子どもへの過度な思いやりや、大人の都合、コマーシャリズム、古くからの因習などが微妙に絡み合った複雑な規制の糸で子どもを雁字搦めにしている。子どもはその煩わしさから逃れて閉じこもり、社会性を拒絶して幾多の問題状況を生んでいる。私たちはこの状況を打ち破り、智恵子抄の東京にはない「ほんとの空」の表現を借りれば、子ども本来の自由な「ほんとの遊び」をさせたいのだ。

自由な遊び場づくりを通してめざすのは、あえて箇条書きにすれば、おおむね以下のようなことである。

(1) 子どもたちに、誰かに課せられたことをやるのでなく、自分で見つけ自分で選んだことを進んで実行する楽しい充実感を体験させたい。それは一人前の大人として社会に役立つ際の基本的な生きる姿勢を形成する。

(2) 自ら目論んだことが上手くいったときの目眩く歓喜・成就感を体験させたい。それは、失敗にめげず、歯を食いしばって再挑戦できる、持続的行動姿勢を育む原動力である。

(3) 子どもが閉じこもることなく、子ども集団や地域社会で、自分を発揮しながら自由に生きることを学ぶ環境をつくりたい。いじめはいじめる側の問題だけでなく、いじめられる側の問題でもある。親の助けなしに自分で友を見つけ、友と上手く付き合う術を、幼児のうちから体験できる、自由な空間を維持したい。

(4) 子どもが遊びを通して競い、切磋琢磨して、自らの力を高めていく遊びを中軸とした子ども集団の再構築を図りたい。文化は、個人の卓越した発想と、異分野の人々の協力によって創造されるものだが、その母体を形成する人間関係づくりのだいご味を子どものうちに体験させたい。

(5) 子どもの遊び心を呼び覚まし、遊びが活性化されるような刺激ある遊びの環境をつくりたい。それは単なる遊び場と呼ばれる場の形成にとどまらず、子どもの生活空間の各種制約を減じ、行動の許容度を増す取り組みをも含んでいる。しかし、とりわけ強い遊びの磁場をもつ遊び場の創造も重要である。

(6) 楽しいことは、いろんな分野に幅広く存在することに気づくよう、いろんな仕事に積極的に取り組む大人との生の交流の機会をつくりたい。マスコミの影響力が強い子どもの情報環境に、マスコミで目立つスターばかりでなく、自分の夢や信念を追うすてきな人がたくさんいるというスロー情報を提供したい。

(7) 子育てには家庭や学校ばかりでなく、地域社会の協力が欠かせないこと、そのための具体的な方策を練る必要があることについて、地域や行政の理解と協力を確立したい。主体的な行動力ある子どもの形成には、大人と子どもの間の適切な間合いやインタープリターを必要とすると思われる。

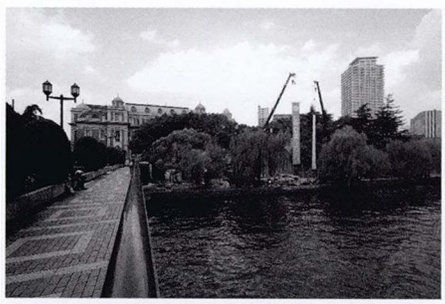
（おおむら　けんいち
NPO法人 日本冒険遊び場づくり協会 代表）

各論 3

今の「あそび」を読み取る

コミュニティカフェの試み

平田オリザ



会場は中之島公会堂のすぐ向かい側
撮影：八久保敬弘

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（以下、CSCD）は、2005年4月、専門家と非専門家、あるいは異なる利害や価値観を持った人々の間のコミュニケーションデザインを構想、設計するために設立された。

「コミュニケーションデザイン」というのは聞き慣れない言葉だろうが、これは要するに、コミュニケーションというものを個別の要素に還元するのではなく、全体の環境や関係の問題として捉えていこうという考え方だ。たとえば、医療施設におけるコミュニケーションの問題を考えてみよう。たしかに、昨今、医師や看護師のコミュニケーション能力が問題になっている。しかし、では、スピーチの練習でもさせておけば、それで問題が解決するというわけでもないだろう。私たちの目的は、ぺらぺらとおしゃべりの上手い医者を養成することではない。大切なのは、たとえば、「患者が医者に対して気軽に質問しやすい椅子の配置になっているか？」「壁の色や医療器具の配置は？」「受付から診察室まで、患者を緊張させるような道順になっていないか？」といったデザインや環境の問題。あるいは、医療過誤が起こりにくい組織の構築。何か不祥事が起きた場合に、それが隠蔽されにくいような情報網の設計。さらにこれらを延長していけば、病院の外観、交通アクセス、いったい病院というのは街のどこに位置すればいいのか、といった「街づくり」の問題へと課題は際限なく広がっていく。

■コミュニケーション能力を育てる■

CSCDは、こういった諸問題を複合的に考え、その活動に大学院生たちを参加させることで、高次のコミュニケーション能力を持った専門家を育成することを目的としている。

私は、初年度は非常勤で、06年度からは専任として、この新設の機関に赴任した。私の主な仕事は、演劇のワークショップを通じて、学生たちにアートやコミュニケーションに関心を持ってもらうことであり、そのための授業をいくつか開講している。また、請われれば、様々な研究室や学部に行って、新入生のオリエンテーションなどにも、私のワークショッププログラムを組み込んでもらっている。こうして一定の成果は上げているのだが、これまでの活動で痛感したのは、コミュニケーション云々という以前に、阪大生には他者との対話の場所がないのではないかという点だ。一体、表現の技術だけを教えても、この孤立した環境の中で、何を、誰に、伝えようというのか。表現、コミュニケーションは、どうしても他者を必要とする。豊中、吹田のキャンパスには、他者が決定的に不在だ。

さらに困ったのは、阪大には、演劇のワークショップを行える適切な教室が一つもない点だった。階段教室や固定席の教室ばかりで、一定の広さで床に寝そべったり車座になったりできる教室は皆無なのだ。

それだけではない。阪大には、劇場もなければ、音楽ホールも美術館もない。学会用の講堂がいくつかあるだけで、芸術のための施設は見事に何一つない。この大学が三万人を超える一つのコミュニティであることを考えれば、これはとても異常なことだ。学長にも直言したが、私からすれば、この環境は、わざと人間を歪めて育てようとしているとしか思えない。

この大学には、大きなグラウンドがあり、体育館があり武道場がある。身体を鍛えるための施設は完備され、共通科目として体育の授業も充実している。しかし、芸術に触れたり、実践するような授業は数少ない。それ故に、そのための施設も用意されていない。

要するに、これは阪大だけではなく、日本の古い大学の特徴なのだろうが、頭と身体を鍛える場所はあっても、心を鍛えたり、心を豊かにする場所はどこにもないのだ。

現在、大学生の休学、退学の原因の第一は、身体の健康より、心の問題だろう。そのために各大学とも、カウンセリングセンターを設置するなどの対処をしているが、これは本末転倒な話ではないか。医者や科学者のコミュニケーション能力の向上も大事だけれど、友だちとさえコミュニケーションをとれない学生たちの方がもっと心配だ。

治療よりも、病気にならない身体をつくることの方が大切で、それは、心の問題やコミュニケーションの問題も同様だろう。だとすれば、心を養い鍛える場所や時間を提供することは、これからの大学の責務ではあるまいか。

欧米のどの大学も、キャンパスの中に、そのような機能を当たり前のこととして持っている。アートやコミュニケーションといった心の滋養が、先端の科学者たちにとっても、新しいアイデアを見つけ出したり、他領域との交流のきっかけになることが分かっているからだ。こういった精神面のインフラを整備しないで、先端研究に科研費だけをばらまいても、未来永劫、日本の大学は国際基準の大学にはなり得まい。



大道芸の様子。会場で様々なイベントが行われた
撮影：CSCD

■「コミュニティスペースの復権」■

とにかく、学生たちが社会や芸術と触れあえる場所をつくらなければならない。

そんなことをつらつら考えているときに、「中之島に新しい駅ができるので、そこで何かできないだろうか？」という話が、知人を介して京阪電鉄から舞い込んできた。そこで私は、京阪側に、新しい駅の機能として、自分がかねてより考えていた「コミュニティスペースの復権」ということを提案した。

商店街がかつて内包していたような対話の場としてのコミュニティスペース。銭湯や床屋さんの軒先が果たしていたような世代を越えた交流の場をつくれないものか。もちろんそれは単純に過去に回帰するのではなく、現代社会に適合したもの。越えるべきは世代だけではなく、地域や民族や国籍も越えた、異なる価値観や文化をすり合わせるための新しい対話の場をつくれないものかと考えたのだ。

より具体的な私のイメージは、朝、昼は普通に営業しているカフェで、夕方の五時半から七時くらいの間だけ、大阪大学の教員や大学院生が哲学カフェやサイエンスカフェを開催する。この対話型のカフェは、すでに大阪大学の学内では、不定期に開催されてきたものだが、それを常設化し、そこに行けば毎日、必ず何らかの議論が行われているような場所を創りたい。

このカフェでは、たとえば「愛とは何か？」といった抽象的な題材から、「携帯電話の功罪」といった身近な話題、あるいは医療の関係者なども招いて学際的に行う「尊厳死は許されるか？」といった具体的な問題までが討議される。参加者は、意見表明を強要されるようなことはなく、結論を下す必要もなく、あくまで議論を楽しみ、その深まりを成果として帰って行く。

学生は、このような常設カフェに加わることで、市民との対話の方法と態度を学ぶ機会を得ることとなる。また当該専門領域の大学院生は、このカフェの主体的な運営に加わり、コーディネーター、ファシリテーターとしての実戦の訓練を積む。

新駅は、北浜の証券取引所の近くにできる。近隣の証券会社に勤める会社員やOLたちは、「一体こいつらは、毎日何を議論しているのだろう」と横目でそれ見ながら家路を急ぐだろう。しかし、もしもそこに、彼らの関心を持つ何らかのテーマが設定されていれば（それは金融工学かもしれないし、子育てやダイエットについての講座かもしれない）、そこに参加もしてくるだろう。

また、週末には乗降客が激減することから、ダンスやパフォーマンスのためのアートスペースとしての活用も考えられる。土曜日の午前中などは、近隣の子どもたちを集めてジュニアサイエンスカフェも開催する。

■地下鉄工事現場での社会実験■

さて、こうした理屈はいいのだが、一体そんなスペースをつくって、本当に人が集まってくるのだろうか。そこで、06年10月に、地下鉄の工事現場を使って、社会実験としてのコミュニティカフェイベント「駅ができる！」を開催することになった。

地下三十メートルの工事現場では、NPO法人ダンスBOXの企画で、ダンスパフォーマンスが繰り広げられた。一方、地上部では、トンネル工事専門の写真家や、現代アートの最先端のアーティストを招いて、対話型のカフェを開催した。哲学カフェでは、新駅にちなんで、「駅とは何か？」を議論した。また大学の授業「アートプロジェクト入門」と連動させて、新駅オープニングにあたってのイベント企画のプレゼンテーションも行われた。

特に、このイベントで注視すべきは、広告代理店などを介在させず、運営の主体を大学とNPOが担った点にある。また、CSCDは単にソフトを提供するだけでなく、地下鉄の工事現場という立地を生かして、様々なデザインの工夫を行った。CSCDには、一線級のアートデザイナーや、ランドスケープデザイナーが参加しており、彼らが総力をあげて、宣伝媒体や会場のデザインを手がけた。カフェ会場のゲートは、鉄パイプとヘルメットでデザインされているし、カフェの椅子はすべて土嚢で構成されている。

こうして開催されたプログラムは、周知期間は短かったが、三日間で千五百人の参加者を集め、新聞などにも大きく取り上げられて大成功に終わった。

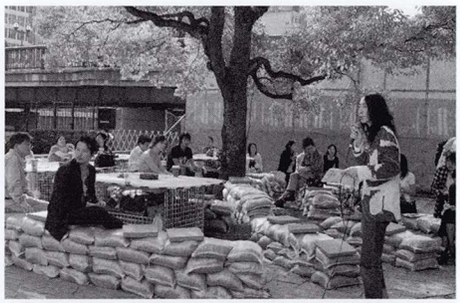
■コミュニケーションを楽しむ■

今後のわれわれの課題は、全学の学生を、いかにこの活動に巻き込んでいくかにかかっている。2008年末の常設カフェの開業に向けて、すでに今年度から、豊中キャンパス内にワークショップも開催可能な教室を確保、改造を施し、週に一、二度の半常設のカフェを開催することになっている。また、学部の一、二年生を対象に「コミュニケーションデザイン・コーディネーター入門」を開講し、このカフェの運営にあたらせる。どんなゲストを呼ぶかといった内容も学生たちに任せることによって、プロデュース能力、企画力をつけてもらいたいのだ。

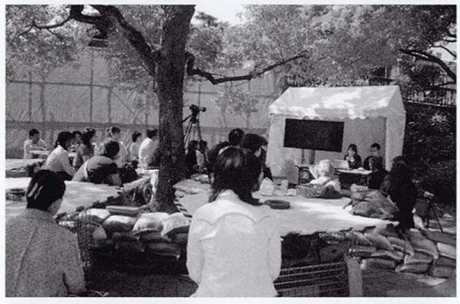
コーディネーター、プロデューサー養成と



特設ゲート。ヘルメットによるデコレーションが施されている
撮影：CSCD



哲学カフェの様子。活発な対話がなされた
撮影：CSCD



阪大生によるプレゼンテーション。新しい駅の利用について提案された
撮影：CSCD



ケータリングカーを誘致して特設のカフェをオープン
撮影：CSCD



メイン会場。すべて工事資材を利用して空間構成されている
撮影：八久保敬弘



ライトアップされた特設ゲート
撮影：CSCD



クレーンに吊られたバナー。遠方からでも目立つ仕掛け
撮影：八久保敬弘



夜のカフェの様子。連日熱気あるトークセッションが実施された
撮影：CSCD

いっても、大手広告代理店への就職率を高めたいわけではない。私が阪大の学生に求めるのは、たとえばホスピスでコンサートを企画できる医者であり、博物館の展示にアイデアを出せる科学者だ。

新しい講座について、各学部の先生方に説明をする席で、私は、「簡単にいえば、毎週学園祭があるようなもんです」と述べた。それを受けて、医学部の先生が、好意的なニュアンスで、「これは、必ずのめり込む学生が出てきますね」と答えてくれた。

もはや実験室と図書館だけが、学問の場所ではない。

昨今、多くの大学が、サテライトキャンパスと称して、ターミナル駅の近くに教室を開き、社会人の受講の便宜を図っている。しかし、そんな「駅前大学」をいくらつくったところで、それは単に、利便性と利潤を追求しただけではないのか。それで、大学の知が開かれたと言えるのか。またそれだけでは、学生の社学連携への参加という本学の目的は果たせない。

私は、新しいカフェの試みによって、大学の知を半ば強制的に世間へと引きずり出したいと考えている。学内にも多くの賛同者が出て、それぞれのゼミを、このコミュニティカフェで公開し、学生が自分たちの専門領域について市民に説明し、質疑に答え、議論する機会もつくることになった。

これらの活動は、従来の大学の在り方からはかけ離れているようにも見えるだろうが、私はそうは思わない。ここで行われようとしていることは、古くはギリシャのアゴラで行われていたような、あるいはルネッサンス期のイタリアにおける原初の大学がそうであったような、市民が自発的に知の蓄積に接近し、交流し、また専門家の側も、それによって知が肉付けされ鍛えられるといった相互的な関係を実現させるためのものである。

このコミュニティカフェ構想は、動き出したばかりで、開業までに、まだ乗り越えなければならない壁がいくつかある。だが、その試行錯誤の過程を含めて、学生たちに楽しんでもらえればと願っている。

（ひらた　おりざ　大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授、劇作家）



土の甕をたたく

各論 4

今の「あそび」を読み取る

遊びを生みだす出会いと発見

―チンパンジーの遊びと環境―

松阪崇久



母が子をくすぐる

遊びはしばしば、生存にとっての直接的な利益のない「無駄」な行動だと言われる。しかしながら、遊びが制限されるとわれわれは苦痛を感じることがあるように、日々の生活に活力を与えるものとして遊びは無くてはならないものだとも考えられる。

近年、子どもたちの遊びの減少や変質を心配する声が高まっている。こういった変化の背景には、自然環境の喪失にともなう魅力的な遊び場所の減少、テレビ・ゲームの流行、放課後の遊び時間の減少、地域の遊び仲間の減少、地域の治安への不安感の増大などのさまざまな要因があると推測される。遊びは時代と共に変わりうるものであるし、近年の遊びの変質が子どもの成長に悪い影響を与えるのかどうかは定かではない。しかし、ヒトが本来持っていた遊びの多様性が失われつつあるのだとすれば、このことには危機感を感じざるを得ない。

そこで本稿では、ヒトと最も近縁な動物であるチンパンジーの遊び行動を概観することを通して、遊びとは本来どのようなものなのかを見つめなおしてみたい。タンザニアのマハレ山塊国立公園のチンパンジーを対象に筆者がおこなった調査に基づいて、野生のチンパンジーたちが環境とかかわる中で多様な遊びを経験する様子をご紹介したい。もちろん、ヒトとチンパンジーでは成長過程で学習される事柄の量も質も異なるうえ、社会的認知能力や社会性にも異なる部分があるため、両種の遊び行動には相違点もあることだろう。しかし、自然環境の中で繰り広げられる野生チンパンジーの多様な遊び行動には、ヒトの遊びの多様性について考えるヒントが隠されているはずだ。

■動物の遊び、ヒトの遊び■

動物にも遊びが見られる。脳の発達した哺乳類には広く遊び行動が認められているし、カラスなどの鳥類にも遊び行動が見られる。たいていの動物は子どもの間にしか遊ばず、成熟とともに遊びが見られなくなると言われているが、一部の種では成熟した個体にも遊びが見られることがある。

ヒトはとてもよく遊ぶ動物であり、遊びの多様性もきわめて高い。子どもたちは毎日多くの時間を遊びに費やす。成熟した大人たちも芸術活動、ギャンブル、スポーツなどの遊びをしばしば楽しむ。また、他の文脈と区別されたいわゆる「遊び」だけではなく、会話、儀礼、狩猟、性行動といったさまざまな文脈にも遊びの態度が持ち込まれることがある。

ヒトに最も近縁な動物であるチンパンジーもよく遊び、遊びの多様性も比較的高い。チンパンジーの子ども同士が出会えばたいていレスリングなどの社会的遊びが始まるし、物を用いた遊びや回転運動を楽しむ一人遊びもしばしば見られる。また、子どもほどではないが、チンパンジーの成熟したオトナも遊ぶことがある。多くの場合は子どもを相手とする遊びだが、オトナ同士で追いかけっこやくすぐり遊びをして「笑い声」[1]をあげることもある。

■チンパンジーの遊びと環境■

野生チンパンジーの子どもたちには、「公園」のような特定の遊び場所は存在しない。木の上でも地上でも、藪の中でも開けた所でも、どこでも遊び場となる。そして、しばしば、豊かな自然環境が多様な遊びを生み出すきっかけとなる。

野生チンパンジーの一日は、採食・移動・休息の3つの活動に大きく分類される。成熟したオトナのチンパンジーが遊ぶのは休息中にほぼ限られるが、チンパンジーの子どもたちの遊びは休息中に限られない。とくに、移動中には多様な遊びが見られる。それは、移動がさまざまな環境との出会いをもたらすからである。これは、人間の子どもたちが通学路においてさまざまな発見をし、多様な遊びを発明するのにも似ている。

「坂道」ではさまざまな遊びが生まれる。坂道をくだる時には、でんぐり返しや、手足を伸ばして転がる鉛筆のように横向きに回転するなどの遊びが見られる。坂道に枯葉が積もっていれば、両手で枯葉を押しながら（または引きながら）進む遊び[2]や、あおむけになって腕を回転させて枯葉の海を背泳で進むような遊びが見られる[3]。

まだ母親の背や腹で運搬されているアカンボウは、「歩行中の母親の身体」を使って遊ぶことがある。四足歩行をする母親の腹の下

に両腕でぶら下がって両足を地面すれすれに垂らしてみたり、母親の背中の上であお向けに寝転がってみたりする。また、運動能力が向上してくると、移動中の母の背から飛び降りては飛び乗るということを繰り返したり、道端の木の枝やつるに飛び移っては飛び戻るといった遊びをするようになる。

「さまざまな物体」も、遊びが生まれるきっかけとなる。手ごろな大きさの石や枝を見つけると、チンパンジーの子どもはそれを拾って投げたり、しばらくの間持ち運んだりすることがある。果実の食べかすや、枯れてカラカラに乾いた果実の皮を大事そうに持ち運ぶこともある。マハレが国立公園となる以前に人が住んでいた廃村跡に残された土の甕を、チンパンジーの子どもが見つけて遊びに用いたこともある。甕を太鼓のように両手でポコポコとたたいたり、頭からかぶって歩いたりといった遊びが観察された。また早木仁成は、枝を他個体と見立てて枝との想像上のレスリングをして遊んでいると考えられる事例を報告している[4]。

「水」も遊び行動を誘発することがある。とくに、小さな水溜りや小川のそばで群れが休息するような時には、チンパンジーの子どもが水面を手でピチャピチャとはじいたり、腕や足で水をジャブジャブとかき混ぜたり、時には腰まで水につかって水の中を歩きまわったりするのを見かけることがある。

「穴」も、チンパンジーの子どもたちの興味をしばしば引きつける環境の一つだ。森の中を歩いていると、ところどころにツチブタが掘った穴が地面にあいている。こういった「穴」を見つけると、チンパンジーの子どもたちは中を覗き込んだり、穴の中に入ったりすることがある。同様の探索遊びは木の洞を見つけたときにも起こる。洞の中を覗き込んだり、木の枝で中を探ったりするのが見られる。木の洞に水が溜まっているような場合には、木の枝や葉っぱなどを取ってきて洞の水に浸して水を舐めとる行動も見られる。このような道具使用行動はマハレのオトナのチンパンジーには見られないもので、道具を用いて水を飲む必要性も低いと考えられているが、近年多くの子どもたちに見られるようになった[5]。「洞の水」に対する子ども特有の好奇心と、さまざまな物の道具としての特性を試してみたいという欲求に支えられて、子どもたちの間に広まったのだと考えられる。

■他者とのかかわりが生みだす遊び■

他者とのかかわりも、遊びが生まれるきっかけとなる。まだ小さいアカンボウの遊びは母親の身体をめぐって繰り広げられることが多い。発達の初期には、座っている母親の体をよじ登っては下りるといった遊びも見られる。また、チンパンジーはしばしば、他個体が注目しているものに興味を惹かれる。たとえば、洞の水を葉っぱで飲もうとしている子どもの周りに他の子どもたちが近寄り、すぐそばから覗き込むことがある。最初の子どもがその場を離れると、今度は覗き込んでいた子どもが洞の水飲みに挑戦することもある[5]。

レスリングやくすぐり、追いかけっこといった社会的遊びは、他者との直接的な交渉があって始めて成立する。これらの遊びは、追う、掴む、咬む、指でくすぐる、叩く、引きずるといった限られた動作パターンで記述可能だが、実際に起こっている交渉は実に多様で複雑である。同一の動作パターンであってもその強さ・速さや向けられる身体部位は一定ではなく、動作の連鎖の仕方も複雑で、展開を予測することは不可能である。これらの遊びに没頭するチンパンジーたちは、互いに動作を同調させあいながらも、ときおり突然の変化をつけることでズレを生み出し、ズレと同調の間の揺れ動きを楽しんでいるようにも見える。このような社会的遊びにおいては、完全には予測できない遊び相手の動きに応じて自分の行動を柔軟に変化させる必要がある。このような柔軟な行動調整能力を訓練する機会として、社会的遊びは重要な意味を持っていると考えられる。

■遊びの多様性を生みだす環境■

自然環境に暮らす野生チンパンジーたちは、坂道や小川、穴、樹木・枝・果実といった環境のさまざまな様相と出会い、発見することを通して多様な遊びを生みだしている。また、他者の存在に刺激されて、あるいは他者と直接かかわることでも、自由度の高い複雑な遊びが生じる。

豊かな環境は多様な遊びを生みだす。子どもたちは多様な遊びを通じて発見を積み重ね、成長していく。このことはチンパンジーでもヒトでも基本的には同じであり、子どもの発達にとって豊かな環境の存在が重要であるということは考えてみれば当たり前のことのように思える。しかし、現代日本の子どもを取り巻く環境はますます画一化され、単純化しつつあるようだ。発見の宝庫であった身近な自然環境は確実に失われてきているうえに、他者と隔絶された個室において子どもが一人で遊ぶ時間が増加している。豊かな自然環境の中で繰り広げられてきた多様な遊びは失われつつあり、他者との社会的遊びにおいて行動の柔軟性を培う機会も減少しているようである。ヒトの子どもは環境の微細な様相をとらえて遊びを発明する素晴らしい才能を持っているはずであるが、その才能が発揮される場が失われつつあるのだとすれば、とても悲しいことである。

近年、動物園の動物の飼育環境を豊かにする環境エンリッチメントの試みがおこなわれている[6]。もともと画一的で単調であった飼育環境を自然状態に近づけて複雑にしたり、他個体との社会交渉を促したり、さまざまな物を与えたりすることで、動物園の動物たちは生き生きと活動するようになるのだという。未来のヒトの子どもたちにも、いつかこのような「環境エンリッチメント」が必要になる時が来るのだろうか？　それとも、われわれは彼らのために、出会いと発見に満ちた魅力的な環境を残していけるだろうか？

1）Matsusaka T 2004. When does play panting occur during social play in wild chimpanzees? Primates 45:221-229.
2）Nishida T, Wallauer W 2003. Leaf-pile pulling: an unusual play pattern in wild chimpanzees. American Journal of Primatology 60:167-173.
3）以下のサイトにてビデオを視聴可能：http://www.momo-p.com/「枯葉の海で背泳ぎ」
4）早木仁成 1990.『チンパンジーのなかのヒト』裳華房.
5）Matsusaka T, Nishie H, Shimada M, Kutsukake N, Zamma K, Nakamura M, Nishida T 2006. Tool-use for drinking water by immature chimpanzees of Mahale: prevalence of an unessential behavior. Primates 47: 113-122.
6）黒鳥英俊 2005. オランウータンを遊ばせる.『第50回プリマーテス研究会記録』、財団法人・日本モンキーセンター、pp.12-16.

（まつさか　たかひさ　財団法人日本モンキーセンター特別研究員、理学博士）

各論 5

今の「あそび」を読み取る

都市（マチ）にあそぶ

李　有師

■街角のペンションで出会う世界■

大阪でペンション？　そんなアホな！と、言われ続けて13年がたつ。開業した平成６年頃はワープロやポケベルがまだまだガンバッテいたし、ケータイ番号を示して予約してくる宿泊者も皆無。もちろんパソコンは大衆化前、宿泊のネット予約も普及していなかった。

翌平成７年、日本社会は大震災を経験し、その前と後ではずいぶん時代、社会が変化したように思える。

私の人生テーマである「都市（マチ）にあそぶ」も、だ。39歳時、一大借金をしてこのペンションをオープンさせたのも、観光の都市政策をいつまでたっても果たせない閉じられた秘境都市・大阪への、ささやかな挑戦だったが、そんな大それたことなど震災を前にどうでもよくなった。

震災の記憶も遠くなりつつあるここ２～３年の世界の流れは、いよいよ無境界化が激しく、その一方で、都市ごとの個性が求められる、20世紀にはなかった欲求が鮮明化しつつある（20世紀モデルは、大阪では「大大阪」に象徴される）。旅人は、そんな様を求めて旅をする。

まことにささやかで恐縮だが、街角のペンションではこんな具合だ。

まさにトルコブルーの瞳をたたえるイスタンブール美人は、ながらく米国ラスベガスのカジノに働きに出たままの彼と、ここ大阪のペンションで落ちあい３泊した。とても魅力的な人だったが、その後のメールやりとりでも、イスタンブール美人の「トルコに帰ってきて」の願いは、ラスベガスの快楽が気に入っている彼には届かないらしい。

フランス、ナントからの熟年ご夫婦は、４泊の間ずっとフランス人らしい「フレンドリーな無口」でいたが、帰る間際、ふるさと自慢の小麦で焼かれた美味しいナントのクッキーをくださった。フランスブルーが印象的な、そのブリキ製容器はいまも大切にしている。そういえば、京都大学の中川先生（都市・交通政策がご専門）からお聞きしたことのある、ナントのトラム（LRT）自慢もしていた。

この正月、ワルシャワからやってきた一人旅の女性は、母国語以外にスペイン・独・英語をあやつるらしく、翻訳が仕事。大晦日の年越しそばや元旦の手づくりおせち、韓国風雑煮のトック、それに日本酒…。その感想を、「ヨーロッパの日本食ブームが目ではない、美味しさだ!!」と、妻の手料理をほめちぎった。そんな大したものではないのに…。

いましがたチェックアウトした、生まれ育ちは香港、現住所・上海、国籍・ブリティッシュの親子３人は、朝食の時間、英字新聞の特集面「いま上海はカオス」の写真を見て突然「oh!」。眼前に除却される旧市街の建物群、その向こうにそびえる、いかにも高級そうな超高級マンション群…。その写真を見て、まさにその高級マンションが「自宅だ！」と、笑った。奥様はハイセンスで美しく、７歳の男の子もカワイイ。あたりまえといえばそのとおりだが、親子３人みな、英語を話す。

枚挙にいとまがないこれらの日常が、大阪という都市（マチ）にあそぶ私の日々で、毎日、毎月、毎年と繰り返され、齢52を数える。定かではないが、宿泊者の国と地域の数も、そろそろ50…そんなところか。

■都市（マチ）をあそぶ旅の心■

ペンションおやじである私にとっての「あそび」は、都市（マチ）をあそぶことに、つきる。だから、一人勝ちの首都圏を歩くのも好きだし、川口あたりのわずかに残るキューポラの街。西川口の駅を出たら即ピンク街、の、ショーゲキ的なまち歩きも、内緒だが、好きだ。ただし、ソウル・チョンゲチョンを視察という名の大名行列で歩いたり、サル真似イベントのネタ探しで、あっちこっちの国をドサ廻りのごとく遊弋（ゆうよく）する無粋は、「都市（マチ）をあそぶ」とは、言えまい。

このあそびの心は、教科書からハミ出した、ちょっとした勇気と、真心の出会いの中に現れ出る。よって、まちがっても、祭りが存在しないフェスティバルゲートや、ものづくりのないワインミュージアム、あまつさえ、先人の探求心と先見性による大大阪をなぞるだけの、何らの勇気も見えない、この時代の「大大阪」などには、「あそびの心」は、無い。

世界の旅人が、こぞって日常生活の冒険を夢見る時代、それは、その都市ごとの違いと、

生活者に出会う旅、そのものであるからだ。無いものねだりのサル真似欧米化や、東京化を念じることでは断じてなかろう。そんなことは東京だけにあればよい。ヒルズやミッドタウンには喜々乱舞しても、OAPやOBPでは話にならない理由(わけ)だから…。そういえば、ATC、WTC、OCAT…アルファベットの、のっぺらぼうみたいな集客都市ならぬ散客都市拠点は大阪に数多い。

なぜ、こうも意味不明の施設と名前ばかりが増えるのか？　海外からの旅人に質問され、流ちょうな大阪弁しか話せないペンションおやじは、答えに詰まる毎日だ。妻はマジメに英語でOAPやOBPを説明しようとするから、いつも大変な時間を要している。

古都でもあるソウルのチョンゲチョンは、日帝時代の朝鮮総督府の除却・撤去に続く、風水的地霊の復元事業でもあったことは、日本ではあまり開陳されない都市再開発におけるゲニウスロキ的視点である。この一連は、チョンゲチョン案内に一役も二役も買う、観光ボランティアのガイドを深く聞けば、それらに伴う「プライドの復元」が、都市にとっていかに重要かを、あらためて思い知る。

都市に誇りがなければ、いまはやりのブランディグはおろか、「あそび」など発祥するわけがない。そこにあるのは、似て非なるフーゾク的消費行為のみ、である。

■大阪のプライド■

庶民都市・大阪にもプライドはある。しかしその象徴的都心に人も元気もない。キタやミナミの話ではない。それらをつなぐアンコ！大阪繁栄の源流である中之島水系のことだ（中之島水系なる表現は存在しないが、10年前からあえてこう呼び、国土交通省や関西電力、京阪や行政関係者に中之島水系の復元を提案している）。

この「都市・大阪」を象徴する水系、その真上に都心サーキットでもあるまいにフタをして、ブンブンブンブン時代錯誤の都心の「自動車中心社会」が座しているからたまらない。これこそ味噌もクソも一緒というヤツで、地霊をないがしろにし土足で踏みつけ続けている。こんな都市(マチ)にプライドも「あそび」も、あったものではない。

2年前、前出の京大・中川先生指導のもとに、小生が理事長（現在は2代目、泉英明クンが務めている）をしていた「もうひとつの旅クラブ」なるNPO法人によって、中之島バラ園を舞台に都市観光モードの交通社会実験が行われたが、この1ヵ月の期間中、頭上の阪神高速急カーブ（バラ園東側すぐ上）では、何と3回も事故が発生、それを目撃した。このように道路構造的欠陥も明確な、地霊にフタするこんな高架道路など、北ヤード開発と淀川左岸線の整備に時期を同じくして無くしてしまえばよい。なぜなら、これらの整備と都心外郭の道路ネットワークを高度化すれば、新たな環状網があり得るはずだからだ。

チープな豊かさと時代遅れの欧米化は、もう過去のものとすべきだ。やるべきは中之島を「環境の時代の『あそびの聖地』に!!」である。関西財界や地区発祥のスパーゼネコンもチマチマした仕事を追いかけず、これらを国家プロジェクトに仕立てる努力をすべきだ。

大阪府もサミット誘致のカラ念仏ばかりでは夢も希望もなかろう。21世紀、日本の都市ビジョンとして「環境の都心」を示し、投資効果の最大化と東京とはひと味ちがう、日本のもうひとつの都市魅力＝環境都心・中之島水系、くらいのことはサミットの本筋として表明してほしいものだ。

換言すれば「都市(マチ)をあそぶ」には、誇りが不可欠。あたりまえに誇りのない都市に「あそび」は無い。

■2つの聖地■

大阪都市圏には2つの聖地が存在する（と、個人的に思っている）。ひとつはこの中之島水系、いまひとつは甲子園である。

中之島水系では、「あそび」を消滅させる高架道路を逆に消滅させ、八軒家浜、北浜、堂島浜、社頭の浜などの白砂の浜（まっ黒な、お江戸の関東ローム層の川辺は絵にならず、よって河岸(カシ)と呼ぶのが一般的。絵になる大阪都心とは、この点が根本的に違う！）をもって「あそび」の地を整える。ちなみに、天神祭の神事の地、若松の浜には、高架道路橋柱がワラ人形のクサビみたいに打ち込まれている。これなど大阪疲弊の呪術的象徴といってよい。（秘境です）

また、「あそび」の地にピッタリのエレキで動く絵になるオリジナルボート（20名定員以下の小型観光船）を、中之島水系全体に巡らせる。船上の案内人は、もちろん都心居住者として帰ってきた“団塊人”のボランティアが務める。365日、年がら年中、天神祭り気分のリバーフェスタ感覚で、あそび心の中に世界の旅人をお迎えする。

これらを、京阪中之島新線整備に伴い整備される、八軒家港などに「都心の港」と「エコ船」としてプロデュースすれば、船と電車が見事に調和した、環境の世紀・羨望の世界的聖地（競争力のある観光拠点）となろう。

いまひとつは甲子園だ。ここにも、より大規模な高架道路が聖地にフタをするように屹立している。この屹立は、もったいないことに甲子園ならではの、駅前から球場に至る牧歌的風情を台無しにしている。いま、球場の大改修が行われているが、本来なら駅、駅前空間と併せ、もっと本気の都市デザインがほしいものだ。

また、奇跡的に残った阪神間で唯一の自然海岸・甲子園浜に至る道路や公団住宅などを一体的に取り込んだ（甲子園駅～甲子園球場～ビーチにつらなるミチ～「あそび」と共にある新住宅団地～甲子園浜）官民一体の構想で、暮らしと共にある「あそびの中のニュータウンづくり」なども事業化させ、「甲子園の聖地、海へ！」と、コピーをかましてもらいたい。

西宮市も役人によるカタイ「環境学習都市（西宮市の施策・シンボルコピー）」ではなく、あそびと暮らしがより一体化された環境学習都市に、阪神・阪急と力を共にし、未来を創ってもらいたい。

■お向かいに出現した「もうひとつの聖地」■

他所の聖地性について考えていたら、我が身のまん前にドエライ聖地が降臨した。上方落語協会・会長の桂三枝さんらが中心となり、多くの浄財で完成を見た「天満天神繁昌亭」だ。

日頃、聖地性とあそびの大切さについてエラソーなことを言っている身ならば、目の前



この社会実験では、バラ園に「ローズポート」なる港（写真中央上部。この社会実験の成功により、以後も活用され現在に至っている）を出現させた。そこからは連日マジカルショーボートという企画船を出した。いまや日本を代表するマジシャンとして活躍するムッシュピエールさんも、大いなる協力をしてくださった。

<写真提供：毎日新聞社>



大潮の引きが最大となった頃に出現する素晴らしい白砂が中之島水系最高の魅力だが、日本の高度な土木技術は、これらを引き出すワザとして、いまだ生かされていない。

「環境の都心」を構築することは、新しい事業機会を誕生させるコンセプトそのものだが、まだまだこれに気づく企業は少ない。

<写真提供：毎日新聞社>



リ・デザインの工事期間中にもかかわらず、楽しげに大阪をあそんだシンガポールからの知的なお二人。手書きの看板を手にハイ・ポーズ。



上方落語協会・会長の桂三枝さん、副会長の桂春之輔さんと。リ・デザインで設置した「ばったり床机」で胡麻まんじゅうを食べながらハイ・ポーズ。桂三枝さんには「繁昌亭横丁瓦版」の題字もいただき、建物壁面に掲示するカベ新聞とした。

に完成する聖地に「己は何とする‼」。建設が正式にプレスリリースされた2004年９月からというもの、悩みに悩み自問自答した。

街角のペンションなる民宿業態は、「ケ」の場のコンセプトで出現させた。それが１年365日、毎日上演の定席の出現、すなわち「ハレ」の場への移行に、いったい自分に何が可能か？「ハレ」の場の降臨に究極の内向き商売、民宿だけでは、不釣り合いは明白だった。

悩みに悩み、新しい聖地・繁昌亭の邪魔になるはずのペンションは廃業も考えた。が、遂に出会いがあった。天満・菅原町の百年胡麻屋、和田萬商店との出会いだ。世界屈指の胡麻商品を、ペンション１階フロント部分をリ・デザインし、世界でただひとつの「胡麻ショップ」にしよう！との計画だ。

10月末の出会いから、話はトントンと進み、繁昌亭に呼応する外部デザインもしつらえ、年末開業にこぎつけた。

「聖地」は出会いを呼び込むチカラも持っている、と確信した。そして「あそび」とは、極論すれば出会いの方便だ、とも気づいた。いま、大阪に出会いはあるのか？「あそび」はあるのか？　そんなことを考えるとき、都市（マチ）にあそぶことの重要さが、あらためて理解できる。

人は一人で生きられず、出会いが救いとなる。都市が「あそび」を放棄したら、そこは死の都市（マチ）だ。

大阪は救いの都市（マチ）になり得るのか、それともこのまま…。

（り　ゆうじ　街角のペンションLeeあるじ）

各論 6

今の「あそび」を読み取る

〈インタビュー〉

あそび心が作品をつくる

露の都



露の都さん　撮影：後藤　清

庶民の暮らしの一場面を切り取り、巧みな話術で噺として演じる落語。2006年9月には、関西で60年振りとなる落語専門の定席「天満・天神繁昌亭」が開業、一層われわれの生活に身近なものとなった。果たして落語は、今後、われわれにどんな「あそび」を教えてくれるのか、また噺家にとって「あそび」とは何か。

独演会・勉強会・講演などの活動の傍ら、定期的に繁昌亭にも出演されている、女性落語家第一号でもある「露の都」さんに話をお伺いした。

■人生はすべて縁です■

―今日はよろしくお願いします。はじめに、落語家になろうとお思いになったきっかけをお聞きしたいと思います。

噺家になろうと思ったのは、高校で進路を決めるときに、その頃全盛期だった笑福亭仁鶴師匠を見て。落語家になったらこうやってテレビ出て儲かるんやなーっていう、ものすごい安易なところから（笑）。当時、桂米朝師匠が審査員をやっていらっしゃった「素人名人会」というテレビ番組に出たんです、このおっちゃんと知り合いなろうと思って。でも本番の日、たまたま米朝師匠がお休みで、代わりに審査員だったのが（師匠の）露の五郎兵衛だったんです。人生はすべて縁ですね。その頃、米朝師匠は女性の弟子は取らなかったんです。うちの師匠だったからとったんですね。

―初の女性落語家ということで、苦労された点などはありますか？

仁鶴師匠にあこがれて入りましたので、やはり古典落語でどっかんどっかん笑わせるような、爆笑型の落語家を目指したい、というのがずっとあります。最近は「みやこ噺」っていって、落語の枕の部分をひとつの噺としてやっているんですが、古典も併行してやっていこうと思っています。

でも、古典落語っていうのは、男社会で、男性用にしか噺がつくられていない、それで300年以上続いているので、女性がやるには無理があるんですね。それでも人情噺だったら、女性の本音の部分をアドリブで入れたりすると、すごく噺が生きてくるんですけれども。でも、同じ古典落語で男（の落語家）と向かい合うと、なかなか勝てない、同じネタで戦うと。それでも「露の都の『初天神』はいいよね」とか「都の『子は鎹』は好きや」っていう風になるような噺づくりっていうのは最近考えてます。

■みんなあそび心で作品をつくっている■

古典落語は、人物をつくるのがすごく楽しいんです。古典というのは、出来たときは新作なんですが、その後何十人もの人の手が加わって、その時代で生きている落語なんです。みんな、それぞれに、その人の個性で色づけしている部分があって、その人なりに面白くしようとする。それが落語の中の「あそび」なんですね。そのあそびが、噺を進化させていくのではないかと思いますね。時代時代の色が入ってきますし、演者の個性が入ってきますし。

落語は最終的には、好きか嫌いかやと思うんです。自分のもっている感性と一致するかっていうか。その一致する人の数の多い人が売れている人、なんですね。みんなにわかりやすく、広くかつ浅くする人もいるし、すごいお客さんを特定するような個性の強い人もいてはるし。でもそれもみんな、その人のあそび心で作品をつくっていらっしゃるんじゃないでしょうかねぇ。

―作品をつくるのは、あそび心なんですか？

でないと…ひらめきとかやからね。ひらめきが出るようにするには、自分の好きなことを探すということですね。たとえば、私は普段テレビが好きでよく見るんですけど、あまり見ない恋愛もので、ずっと見続けた番組がありまして。ええなー、すっごく素敵だなって思いながら見てて。で、これなんとかならへんかな、噺にうまいこといかへんかな、って思っていろいろ考えて出来たのを今、みやこ噺でやってます。

だから、「勉強しようと思ってしたことは身につかない」って師匠が言ってました。自分が好きなこと、楽しいこととかかわると、それはすべて自分の肥やしになる。自分の好きなことを集めれば、それが大きなあそび心

になっている、そんなことじゃないですかねぇ。

■教えられたことをきっちり、では笑えない■

―人々に心地よい場所をつくっているわれわれも、時々、自分自身に、もっとあそび心が必要なんじゃないかと思うことがあります。

似たようなことは、われわれの世界でもありますよ。古典落語だったら元がしっかり出来上がっているので、変えたらあかんっていう方もいてはるんですよ。でもね、きっちりやったんでは笑えないのよ。教えられたことをきっちりやるだけでは、しゃべっているだけ、伝えているだけ。確かにネタがいいから繁昌亭のお客さんとかだったら受けますよ。でもそこから飛び出して、「この次も、露の都の落語を聞きにいきたい」って思わすためには、そのネタにあそび心がないとダメ。例えば、人物の描き方に工夫したり…。

テレビや映画で出てきた良い役って、記憶にインプットされますよね。で、古典でその役と合いそうな人物が出てきたら、この前のあのテレビのあの役のあの雰囲気でやろう、とか考えるわけです。この「御奉行」は教えてもらった御奉行ではなく、好きな遠山の金さんの杉良太郎の御奉行でやろう、とか。そうするとこの御奉行は生きてくるわけです、私らしさが入る。自分の好きな人の感じで演じると、台詞は一言も換えなくても、その演じる人らしくなるんです。教えてもらったことをそのままやるだけでは、私は面白くないと思うんですよね。

■受けないのは、お客さんからみてあそびがないとき■

―お客さんの感性とか相性というのは、探りながらあわせてみたりするんですか。

お客さんはものすごく多いので、あわせるというのとはちょっと違いますね。ただ、舞台にあがったときはお客さんと友達になろうという気持ちになって、絶対人が嫌がること言うたらあかんということは教わりました。残りは自分の持っている今までの経験で…。自慢やないけど受けないっていうのはさすがにもう無いけど（笑）、でも、受ける量やポイントが違うとかはありますよね。その段階で、自分では合格点ではないんです。そのときは、なにか自分の中で欠陥があるんです。ちょっとお友達になろうという気持ちが欠けていたとか、舞台に出る前、なんかいやなことがあって、それを引っ張って出てしまったんかな、とか、自分では気づかずにテンションが低かったとか。だから出囃子が鳴ったときは、ものすごい気合は入りますよね。

―受けに関係なく今日は良かった、ということはないんですか。

自分だけがよくてもね。受けないのは、やっぱり何かあるんですよ。何がいかんのだろ、ってずっと考えますね。そのときは、やっぱりあそびがないんですよ。お客さんからみて。間違っても何しても、その人の生き様というか、取り組み方というか、たどたどしくてもその人の姿勢が出てくる方が、伝わりますよね。技術的なことはある程度やっていると身につきますから、あとは精神面、メンタル的なほうが難しい。日常どれだけ楽しく生きているかですよね、前向きに。それが出てくるんだろうなと思いますね。

■あそびって飲み会とかとちゃうからね(笑)■

天性と適性っていいますよね。適性っていうのはお金儲けができる仕事。天性っていうのは自分の好きなことで、これではお金儲けはできない。だけど適性だけでは結構ストレスをかかえたりしますよね、お金儲けですから。でもこれだけでは人間ってバランスがとれない。一方、天性っていうのは、自分の好きなことなので、なかなか収入にはつながってこない。天性と適性が一緒になって仕事を持っている人は非常に少ないですが、ひょっとしたらそれが落語家なのかもしれませんね。私は、天性と適性が一緒になってお金儲けできているかな。でもそんな人は非常に少ない。

だから、天性の部分を見つけるのが大事だと思いますね。それも一生懸命になる。集中するということですね、それに。没頭するというか。中途半端やないということですね。そうすると本当のあそびができるんと違うかな…。別にあそびって飲み会とかとちゃうからね（笑）。でも今の時代、好きなことを見つけるって大変ですよ。あります？　好きなこと？

―でも、結構仕事も好きなんですよ。

それがあかんねん、男の人は（笑）

■繁昌亭が出来たおかげで、私たちも競い合うようになっている■

―天満・天神繁昌亭ですが、出演されている側としていかがですか。

雰囲気すっごいいいですよ。毎月「大阪名物・元祖あほの会」っていうのを、肩の凝らない、楽しい会がやりたいなと思ってやっています。初めての人にはよいと思います。暮らしの中に落語がある、そんな風になりたいですね。「あ、今日は何か聞きたいな、そんな気分だな」っていうときにふらっと行ける、どこで落語会やってるんやろって探さなくてよい、お客さんにとっても素敵な場所になってるんじゃないですかねぇ。あと、落語はテレビではちゃんと味わえません。生でないとだめ。絶対生。なんでもそうだと思いますけど。

繁昌亭には、落語が初めての人がたくさん来はります。最初は繁昌亭を見に来た人が、「落語って面白いな」ってまた来るきっかけになって落語ファンがどんどん増える。私はその中で「あそび」心を持ちながら、落語を楽しく演じていきたいです。

（まとめ／三宅次郎）

と　き　2007年３月13日（火）
ところ　阪急不動産㈱会議室
インタビュアー／三宅次郎・辻武之・守井辰

露の都　プロフィール

1974年、露の五郎兵衛に入門。日本で第一号の女性落語家。㈳上方落語協会女性部（上方笑女隊）部長。古典落語ひとすじにH13～H17で「露の都古典落語百選」を完成し、以後「露の都スーパーらくご」を年４回、笑福亭鶴瓶と継続中。一方で、６人の子を持つ肝っ玉母さんでもあり、落語にかける夢と家事、子育ての奮戦記を語る「夢に向って、落語に生きる」は各地でみんなに元気を出す講演、と大好評。

総論 2

これからの「あそび」

これからの日本を豊かにするための「あそび」考

—“禁じられた遊び”の国、日本を解放しよう—

木津川 計

■〈道楽〉はなぜ放蕩・遊蕩視されたのか■

(1)“禁じられた遊び”の国・日本

英語で「あそび、競技」はplayであり、playerはplayする者であることはご存知の通りだ。が、日本語の「あそび」が「あそび人(にん)」(遊び人)になると「一定の職業を持たず、ぶらぶらと暮している人。特に、ばくち打ち。やくざ」(広辞苑)を意味する。だから、この国ではあそぶことはなにか後ろめたく憚られたのである。

昔は、働いていない若者は年長者にたしなめられたものだ。「お前、いま何しとるんや」「あそんでまんねん」「あかんやないかい、若い者(もん)がぶらぶらしてては」。だから大方の若者は勤労の意欲を高め、よく働いたのである。

その「働く」の反対語は何か、と問うと現役の勤労者の9割、学生でも8割が「休む」と答える。それは間違いで、「あそぶ」が正解なのだ。中には「寝る」と正直に答える疲労困憊した可哀相な男がいたりする。勤労男性の多くが休日の休み方を「テレ寝」でいまも過ごすのは、成果主義が導入されて疲労度が増しているからである。

『レジャー白書』(2006年)は労働時間について次のように述べる。

「正社員の労働時間はほとんど短縮しておらず、実質的な時短や休暇取得は依然として進んでいない」「正社員の負担は増えており、年次有給休暇取得率の減少傾向にも歯止めがかからない。平成元年以降最も取得率の高かったのは平成5年の56.1%であるが、平成12年に50%を割り込んで以後減少を続けており、平成17年は46.6%。休暇をめぐる環境は改善の兆しが見られていない」。

人間が人間らしく生きていく上であそびは大切なことだ。仕事や勉強から解放され、のびのびと好きなことをして楽しむ。あるいは趣味に時を過ごす。そんなあそびは時間的ゆとりの所産であり、心身を再生させる大事な条件なのである。

中国人は時間的ゆとりのあった何千年もの昔から心身のリフレッシュを「寝る」ことに求めず、自然に親しむことと考えていた。だから「人」が「木」に寄りかかる意味合いから「休む」という字は生まれたのだ。さしずめいっときはやった「森林浴」のごとき過ごし方、それが人間にとっての「休む」にほかならなかった。音楽に休止符があるのも、次のフレーズを新鮮に聴かせるためにあるのだ。

あそびは余暇の中でこそ可能だ。その「余暇」を広辞苑はこう説明する。「自分の自由に使える、あまった時間」。金田一春彦編による現代新国語辞典は「仕事のあいまのひまな時間」であって、「あまった」「ひま」という捉え方、即ち、余計で余分な時間帯という認識である。

人間が心身をリフレッシュさせるために暇は必要なものだとは考えず、leisureの訳語を“必暇”でなく「余暇」と定め、誰一人それを疑問に思わず今日に至っているのは、日本人全体がワーカホリックにかかっているとしか言いようがない。

(2)「道楽」の意味はなぜ二分したのか

なぜ日本人があそびに後ろめたさを覚え、レジャーを余計で余分な暇とみなすようになったのだろう。さかのぼれば明治維新以後、日本が“脱亜入欧”を果たし、ヨーロッパの仲間入りをするための近代化をしゃかりきに押し進めるプロセスの中で日本人のあそび観はゆがめられ、ねじ曲げられたのである。

それは「道楽」の意味がねじ曲げられたのと軌を一にする。たびたび広辞苑を引き合いに出して恐縮だが、「道楽」は次のように説明されている。

①(道を解して自ら楽しむ意から)本職以外の趣味などにふけり楽しむこと。また、その趣味。
②ものずき。好事。
③酒色・博打などの遊興にふけること。放蕩。遊蕩。また、その人。

「道楽」の意味合いの二重性である。人間らしい生活のために①は当然肯定されねばならない。だが、③の感心できない意味も抱き合わせになっているから、どちらの意味で「道楽」を使っているのか、判断に苦しまざるを得ない。

いや、むしろ「道楽」には③の意味合いが濃く、「道楽息子」を持った親ごさんの苦労が察せられるし、「女道楽」な男はその身持ちの悪さで評判は悪く、「道楽者」は後ろ指をさされて信用されない。それらのすべては「道

楽」が放蕩視、遊蕩視されているからで、①の意味合いは完全に無視されているのである。

評価すべき結構な意味合いの①が不当に無視され、なぜ貶められてきたのかは“脱亜入欧”のための「富国強兵」政策に大きく起因していたのである。

鎖国をしていた小さな島国の日本は、世界の進運に大きな遅れをとっていたのだ。その日本がヨーロッパと肩を並べるには国を富ませなければならない。遊び人の天国になっては実現不可能だから、教育の全機能を挙げて立身出世主義と勤労の美徳観を子どもたちに叩き込んだのである。

明治17年、文部省は「仰げば尊し」を歌わせ始めた。その歌詞に言う「身を立て、名をあげ、やよ励めよ」はまさに立身出世の勧めそのものであった。さらに大正元年からの「村の鍛冶屋」は「しばしも休まず槌打つ響き」の「仕事に精出す村の鍛冶屋」を称えることで勤労の美徳観はやがて日本人の習い性にまで染め上げたのである。

かくして日本人の長時間労働性は国際的認知を受けるまでになった。当節言うところの“企業戦士”“会社人間”は「村の鍛冶屋」のまごうかたなき末裔たちなのである。もっとも、「村の鍛冶屋」は日本人の働き過ぎを批判する国際世論に押され、1977年（昭52）小学校の音楽教科書から姿を消した。だからいまの30代以下は知らないから歌えない。人間らしい生き方がようやく認められるようになったのである。

労働の大切さを筆者は否定するのではない。国民の多くが怠け者になったら国は傾く。だから額に汗することの大事さ、我慢や辛抱の大切さもまた忘れてはならないのだ。さりながら、働くばかりが能ではない。そのことを筆者は強調しているのである。「よく働きよくあそぶ」、そのあそびが心身をリフレッシュさせ、心機一転させるのである。

あそびに対して禁欲的な国民性に養われたのは、すべて明治以降の近代化過程のしからしむるところであった。むろん、すれ違いの陶酔やつかのまの興奮といった風俗的なあそびはむしろ野放しにされ、うっ屈のガス抜きにはされていた。だが、明るい太陽の下での健康で人間的なあそびは抑制され、禁じられる、その歴史が日本人のあそび観をゆがめたのである。

そのゆがみは日本人の趣味観にも及び、狭い枠の中に趣味をとじ込めることでも連動していたのである。

■抑圧された趣味の爆発■

（1）あそびとしての趣味の解放

「あなたのご趣味は何ですか？」と聞く。「いささか謡を嗜んでいます」とか「パッチワークに凝っています」と答えたりする。即ち、実技的趣味（hobby）である。

ところが趣味にはまだ別の意味がある。「この庭園は何回見ても飽きがこない」という情緒をひき起こすたたずまいであり、もう一つ、「あの方のネクタイはいつもシックねえ」とか「あの装飾は悪趣味だ」といった趣味的感性（taste）も趣味の範疇に私たちは含めている。

ところが広辞苑は初版（1955年）で〈趣味〉を次のように説明していたのである。

①感興をひき起すべき状態。おもしろみ。あじわい。おもむき。②美的対象を鑑賞し批判する能力。

お分かりのように趣味とは、雅趣に富む状態と、それを見分ける趣味的感性の意味だけなのである。実技的趣味の意味合いは全く触れられていない。

ところが第二版補訂版（1976年）で次の説明になった。

①感興をさそう状態。おもむき。②美的な感覚のもち方。このみ。③専門家としてでなく、楽しみとしてする事柄。「――にピアノを弾く」。

第二版補訂版にしてようやく、いま趣味として一般的に使われる実技的意味合いが書き加えられて以降、只今の第五版までこの説明が踏襲されている。ということは、1955年から60年代の高度経済成長期を含め、76年までのおよそ20年間、“日本の国語辞典の中の国語辞典”と称される広辞苑は実技的趣味に何の関心も払わず、全く無視していたのである。

いや、無視というより、人間は趣味を楽しむものだという認識が編纂に当たる偉い国語学者たちにもともとなかったということなのだ。明治以来の勤労の美徳観は、彼たち学者からも「楽しみとしてする事柄」の視点を奪い去っていたのである。

ことに高度経済成長期は、経済拡大の赤い炎が燃えさかった時代であった。なにしろ“月給二倍論”と言い換えられた所得倍増政策は、勤労者の長時間労働と低賃金をベースに爆進したのである。5時や6時に退社して習い事を男性が身につけたり、楽しんだりする時間的余裕は与えられなかったのである。

その60年代、若い未婚の女性はお茶やお花や料理の実習に大抵通った。そんな趣味を楽しんでいたのではない。「花嫁修業」と言われる必須の結婚前教育として、否応なしに身につけねばならない実技だったのである。自発的意思に加え、「楽しみとしてする事柄」でなければ、趣味を楽しむとは言えない。

だが、先述した道楽がまだ「本職以外の趣味などにふけり楽しむこと」の意味で復権せず、依然として放蕩視、遊蕩視される、言うならば本来の意味の逼塞状態に置かれているのに比べれば、趣味は十全の意味合いで市民権を得たのである。

あそびは心身をのびやかに、好きなことをして楽しむことである。趣味も同様で、嫌いなことを苦しみながら続けたりはしない。もっとも、実技の技倆を身につけ、向上させるに懸命になることはある。ありはするが、あそびとしての趣味は、本職でないだけに楽しみの要素が大きい。

（2）趣味を楽しむ三条件とは

あそびとして、楽しみとしての趣味は団塊の世代のこれからの生き方の中で脚光を浴びざるを得ない。なにしろ向こう3年の間にざっと700万人の定年後世代を生み出すのである。もっとも、すべてが自由人にはならない。なにしろ年金受給の64、65歳まで食いつながねばならないのである。幸いにして民間企業に再就職できたにしても現役時代の半分ならいい方で、泣きたくなるほどの薄給に耐える人も多い。

趣味を楽しむには、次の三条件が必要なのだ。

①経済的ゆとり②時間的ゆとり③精神的ゆとり

三条件のうち主としては①②だが、金はあっても時間がない、時間はあっても金がない。

このようにどちらか一方を欠いては趣味を楽しむことはできない。最悪は、金もなければ暇もないケースで、まず趣味を楽しむには遠い距離に位置している。

③の条件も意外に重要で、①②を満たしても心労が大きかったり、深刻な悩みが尽きない状態では、やはり楽しむことができない。

団塊の世代は②には恵まれる。③も心配ないとして、問題は①だ。金持ちで時間持ちが団塊の世代と言われ、「これから『黄金の十年』を迎える」と堺屋太一さんが言うものだから消費の市場が色めき立っている。

果たして「黄金の十年」が到来するのか？する人もいる。リッチに暮らせる上流もいるが、大方は違う。日刊ゲンダイが「『団塊サラリーマン』の実像」（07年２月20日）で、次のように伝えた。

「愕然とする数字がある。日経が47～49年に生まれた給与所得者を対象に行った調査で、実に25.6％が『退職金なし』という回答だったのだ。もともと退職金制度のない中小企業が多いということだが、それにしても４人に１人が退職金ゼロである。さらに『退職一時金は出るが500万円未満』という回答が22.8％、ゼロと合わせると、ほぼ半数の団塊サラリーマンが退職金ゼロか500万円以下ということだ」。

なるほど団塊サラリーマンの平均退職金は２千数百万円という調査結果もあるが、それは４年制大学を出、上場企業に勤める恵まれた人たちであって、団塊のすべてが手にする訳ではないのだ。

厚労省の「国民生活基礎調査」（06年）は、高齢者世帯の生活が「大変苦しい」「やや苦しい」で50％を占めているのだ。「時は金なり時ばかりありあまり」（白石朝太郎）と嘆くリタイア組が半数に及んでいることが分かる。それでも団塊の世代が消費の市場をいっとき潤すことは確かだろう。だが、700万人は降ってわくのではない。これまでも生活者として暮らしていたのだ。その生活スタイルがそのまま延長されるなら、消費の市場は何の変化も起こらない。第一、収入は減るばかりで増えることがないのだから。

朝日新聞（07年４月６日）も「団塊退職の波」の中で「団塊世代への退職金が一時的に、個人消費を押し上げる要因になるとの指摘もあるが、中長期的には消費へのマイナスを懸念する声は多い」と伝えた。

その通りで、消費の市場の潤いは、高度管理社会の束縛から逃れ、自由時間を手にした人たちの新たな購買と、いろんな領域への参加活動によってもたらされる。その変化は従来の生活プラスアルファと捉えるぐらいでちょうどだろう。

■夫婦同伴文化の勧め■

（1）何が夫婦同伴文化を阻んだのか

右の表は団塊世代が退職後、従来の生活プラスアルファ程度の楽しみを求める際の目安になる余暇活動への参加実態である。

お気づきになられるかどうか。団塊世代の余暇活動参加率で男女差の大きい順位を３位まで挙げると、①「バー、スナック、パブ、飲み屋」で31.4％の差②「音楽会、コンサートなど」19.9％の差③「国内観光旅行（避暑、避寒、温泉など）19.8％の差である。

何が鮮明なのか。男性は飲みに行く回数が女性に比べてはるかに多い。社交やうさ晴らしや接待などの多さである。が、音楽会やコンサートなどでは断然女性が多く、国内観光旅行の場合も同様である。ということは、これら三つの余暇活動は多くの場合、男女別々に参加しているのであって、夫婦同伴での参加は少ないのである。むろん、飲みに行ったり、音楽会や国内観光旅行に夫婦同伴で参加する人たちもいる。いるのだが、欧米に比べてわが日本人は〈夫婦同伴文化〉の確立ではるかに遅れをとっているのである。

明治以来、しゃかりきになっての「脱亜入欧政策」は欧米の文明文化を取り入れ、模倣に継ぐ模倣で大成功を収めた。即ち、生活様式で欧米とほとんど差のない国に大改造したのである。それは、言葉や風土の違い以外はあまり変わらない生活を私たちは営むようになったということなのだ。

だが、一つだけは絶対に見習うまいとした生活様式があった、その様式を私は夫婦同伴文化だと捉えているのである。とにかくこの同伴文化の日本上陸だけは、この国の波打ち際で防ぎ続け、今日に至ってなお１センチも上陸させていないのである。

団塊世代の余暇活動参加実態（『レジャー白書』2006）

	全体数2425人	団塊世代248人	団塊男性127人	団塊女性121人
1．スポーツ部門（全28種目）				
ゴルフ（コース）	9.8	13.3	20.5	5.8
ゴルフ（練習場）	9.4	10.1	13.4	6.6
ジョギング、マラソン	19.2	22.2	19.7	24.8
エアロビクス、ジャズダンス	4.0	4.8	1.6	8.3
2．趣味・創作部門（全30種目）				
日曜大工	9.7	14.5	26.8	1.7
スポーツ観戦（テレビは除く）	14.7	13.7	22.0	5.0
写真の制作	10.3	10.5	15.7	5.0
園芸、庭いじり	29.4	46.4	39.4	53.7
美術鑑賞（テレビは除く）	12.4	17.7	11.8	24.0
観劇（テレビは除く）	10.5	15.3	7.9	23.1
音楽会、コンサートなど	22.3	27.0	17.3	37.2
編物、織物、手芸	10.7	8.5	0.0	17.4
洋裁、和裁	6.8	7.7	0.0	15.7
コーラス	2.9	3.6	0.0	7.4
3．娯楽部門（全21種目）				
宝くじ	39.7	51.2	59.1	43.0
バー、スナック、パブ、飲み屋	32.6	34.3	49.6	18.2
中央競馬	6.8	7.7	10.2	5.0
サウナ	8.8	9.7	13.4	5.8
パチンコ	15.5	15.7	25.2	5.8
麻雀	6.9	7.3	10.2	4.1
囲碁	3.2	3.6	6.3	0.8
クラブ、キャバレー	3.2	3.6	6.3	0.8
外食（日常的なものを除く）	64.8	66.1	59.8	72.7
4．観光・行楽部門（全12種目）				
登山	6.0	8.5	8.7	8.3
ドライブ	47.3	47.6	53.5	41.3
催し物、博覧会	21.9	30.6	26.8	34.7
国内観光旅行（避暑、避寒、温泉など）	52.9	60.1	50.4	70.2
ピクニック、ハイキング、野外散歩	23.8	27.8	26.8	28.9
海外旅行	11.7	15.7	11.0	20.7

（団塊世代の余暇活動参加率が全体平均を上回る種目を表示）

欧米では夫婦同伴文化は日常的な習慣であり風景であって、何の不思議もない文化の定着なのだ。

ではなぜこれほど模倣してきた近代の歴史だったのに、夫婦同伴文化の上陸だけは拒み、定着させようとしなかったのだろう。その理由は明白だ。立身出世を煽り、勤労の美徳観を叩き込まねば「脱亜入欧」政策は成功しないのである。だから明治・大正・昭和戦前の権力者は〈ときめき〉と〈たかぶり〉の情感ばかりを植えつけ、文明の進んだ欧米を仰ぎ眺めてはときめき、たかぶりながらの「脱亜入欧」路線を突っ走らせたのである。

(2)〈やすらぎ〉の情感をこそ

対象に向かって、ときめきを覚えず、たかぶりを感じなければ本気になれない、そんな国民になってしまった、ということは、〈ときめき〉と〈たかぶり〉を日本人の習い性にしてしまったということなのだ。するとどうなるか、いくら灼熱の燃ゆる恋でも結婚すると情熱は急速に失せる。相手へのときめきや、たかぶりはせいぜい3年、よく持って5年ではないだろうか。あとは馴れと倦怠で、緊張のない夫婦になってしまうのである。

であるなら、欧米で夫婦同伴文化が定着しているのはなぜなのか。結婚して20年も30年も相手にときめき、たかぶり続けているからなのか。そうではない。ときめかず、たかぶらなくなれば、さっさと離婚する、その離婚率は日本人よりはるかに高い。

そんな欧米人が夫婦同伴文化を定着させているのは、日本人の知らない第三の情感、即ち〈やすらぎ〉の価値に目覚めていたからにほかならなかったのだ。私たちは明治以降、〈やすらぎ〉を許されないまま突っ走ってき、そのお蔭で経済大国になりおおせたのである。

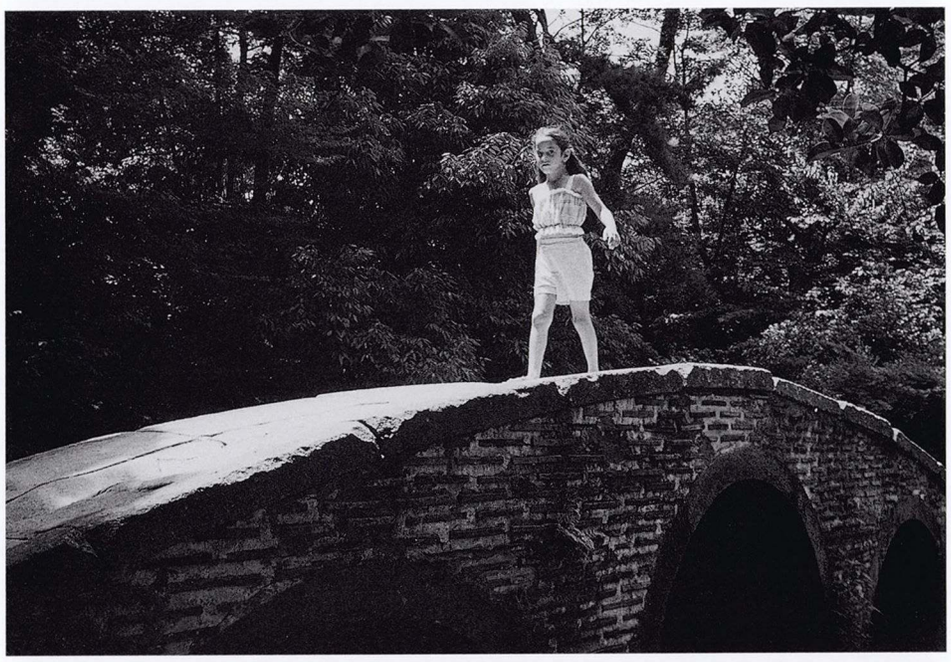
人間が人間らしく生きていくには、もちろん〈ときめき〉と〈たかぶり〉の情感なくしては国が傾くから、その必要を認めよう。その必要性だけではなく、〈やすらぎ〉の余裕があってこそ、次の〈ときめき〉や〈たかぶり〉につなげていけるのである。

これからの日本人が〈やすらぎ〉の情感を持ったとき、夫婦同伴文化は必ず生み出されてくると私は信じている。連れ添って数十年、もはや相手へのときめきやたかぶりはない。ないのだが、やすらぎの気持ちは大きい。夫婦だから安心できる、気をつかうこともない、そんなやすらぎが音楽や演劇の観賞に向かわせる。“振り向けば君がいて”の夫婦同伴旅行を活性化させる。

男女共同参画社会の到来である。それは、この国の地上に初めてもたらす夫婦同伴文化の定着する社会なのである。すると、夫婦による余暇の過ごし方が変わる。日本人のあそび観も変わる。「娯楽」という字を分解して、「女を呉れたら楽しい」と私は分解してきたものだ。実際、あそびは男本位で、昔の観光温泉地は男を喜ばす施設ばかりを発展させ、「女子供」は念頭に入れなかったのである。そんな「娯楽」観の修正をも迫って、夫婦同伴文化の成立は新しい需要をあそびの世界や文化の領域にもたらすのである。

音楽会に演劇観賞、国内外の旅行やパーティー、飲み会や社交に夫婦同伴で参加する、その〈やすらぎ〉感が、しかし楽しむ人口を2倍に増やすのである。明治以来の「脱亜入欧」はそのとき初めて完全に実現されたと言えるのではないか。私はずーっと思い、願い続けてきたのである。

（きずがわ　けい
『上方芸能』誌代表、和歌山大学客員教授）



「建築と社会」誌

特集一覧●1985～2006

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1985 vol.66	●大阪湾物語＊	●東海の現在と近未来	●自由様式への道―建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホール―それが生みだす文化―	●建物の表情―最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合―人体と建築にみる― ●日建設計作品＊	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 vol.67	●これからの住空間―都市型集合住宅にみる	●屋根―そのデザインと素材	●現代デザイン―ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住宅と設備	●開発―その創造的仕掛けの鍵をもとめて― ●ツイン21	●CAD―その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 vol.68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚の街づくり＊	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統―東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明＊	●制振＊	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営善	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備II ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識―中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化―設計の多様化をめざして―＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営繕の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感―建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり―I― ●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくり―II― ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識―複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木―構造技術の世界― ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語―人がかわる、まちがかわる―	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン―東海支部―＊	●建築家のための設備知識―集合高層住宅の設備システム―	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り―住宅・都市整備公団関西支社10周年―	●木構造を使ってみませんか―集成材による構造―＊	●接着―建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊	●屋台―仮設の魅力に学ぶ― ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営繕	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境―限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生―構造技術の役割― ●大阪市営繕	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境―人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと貌	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって―会員作品＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美―建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音―騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃―まちの活性化と地方文化＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法―会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江―その地方振興と文化＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●金沢・倭塾―風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念/建築と私と社会―80人の眼―＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興―法・制度の運用と新たな展開へ― ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法―会員作品―	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州―諏訪とその周辺―	●街並みの演出―最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備―ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98―21世紀に向けて	●ゆれをとめる―たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を綾どる小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃―街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法―まちづくり・すまいづくりへの展開―	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア―都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部―しまなみ海道と中国地方の街づくり―	●東海支部会員作品2000 ●越中・富山―地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る―測定方法と測定結果が意味するもの―	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法―パートII―	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ―わざ、もの、こころ―	●時間	●私の空間作法―会員作品― ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者
2001 vol.82	●エヌ・ティ・ティファシリティーズ	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●IT社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境―近未来に向けて今できること― ●大建設計―作品特集1996～2001―	●建築の力都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法―会員作品―	●第48回青年技術者 ●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館＊
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局営繕部＊	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心―パート2―	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●淡町リバープレイス	●建築をささえるセンサー	●建築とボランティア	●時を超えて～サステナブルエンジニアリングの現在～	●私の空間作法―会員作品―	●第49回青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋―この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える―	●サスティナビリティ―次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン～	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョン―インテリアから発信するまちなみ―	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジー～建築の主観的価値について～	●力と楽しくつき合う方法	●私の空間作法―会員作品―	●第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	●大阪市住宅局	●都市緑化	●東海支部会員作品 ●愛・地球博＊	●省リスクな「まち再生」＊	●リニューアルの技	●地域住民主体のまちづくりと支援制度	●Product Design＋1	●銭湯～心地よさを求めて～	●建築家とは何か	●巨大地震にそなえて	●私の空間作法―会員作品―	●第51回青年技術者
2005 vol.86	●震災から10年	●「健やか」 ●長崎医療センター	●東海支部会員作品2005 ●東海における施設づくりへの新たな試み	●建築の経済化	●住まい方の変化	●人工栽培	●次世代に伝える「木」の建築 ●「建築と社会」1000号記念	●改正建築基準法と景観緑三法	●火災から守る	●構造の過去から未来へ＊	●私の空間作法―会員作品―	●第52回青年技術者
2006 vol.87	●都市環境デザインと参加のまちづくり	●「地方空港の時代」～まちと共存する空港づくり～	●東海支部会員作品2006＋東海支部特集3部作＊	●都市再生の本質～光と影のはざまで～	●変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	●身近な省エネルギー～エネルギーをたくわえ、有効利用する～	●設計図が伝えるもの	●建築物の安全・安心＊	●第53回青年技術者	●「セキュリティ」	●もしも…～構造が未来へつなぐ夢～	●私の空間作法―会員作品―

＊は欠号

437

法令コーナー

京都府景観条例の施行

～協働により府民ぐるみで景観づくり～

岡本哲夫

京都府山城広域振興局建設部乙訓土木事務所技術次長

京都府景観条例（平成19年京都府条例第15号）が平成19年３月16日公布され、４月１日から施行された。景観法の施行後に新たに策定された景観に関する都道府県の条例としては、５例目となる。

条例検討の背景と経過

これまで京都府では、各地域の景観形成は市町村にお任せするという姿勢をとってきたが、景観法の施行をきっかけとして、平成17年12月に「京の景観形成推進プラン」を策定し、今後の京都府の景観施策の基本方向を示すとともに、景観条例の制定を宣言した。

H18. １月　京の景観シンポジウムの開催（参加者180名）
　　５月　景観条例検討委員会の発足
８月～９月　景観フォーラムの開催（４地域。参加者200名）
　　11月　パブリックコメント（意見９件）
H19. ２月　府議会上程

制定に至る経過を詳しく追ったのは、条例の検討・合意形成のプロセスを大事にし、府民の意識醸成につなげよう、という委員会の意向に沿ったもので、ある程度は府民の参加と関心を呼ぶことができたと思っている。

条例の構成及び特徴

景観法は、景観の整備・保全を進める枠組みとして景観計画を用意している。その仕組みは①都道府県または知事の同意を得た市町村などの景観行政団体が、景観形成を図る必要がある区域について景観計画を策定し②景観計画区域において建築など一定の行為を行う場合に、届出を求め③計画に適合していない場合に勧告等を行うことにより④建築物等を規制誘導していく、というものである。

これを踏まえて、建築物等の規制誘導については法を活用し、条例では、法を補う形で府民の景観形成活動を応援していくというのが条例の基本的な考え方であり、法と条例を両輪とした景観行政の推進が狙いである。

条例は、「良好な景観を保全し、育て、かつ、創造することにより、府民共通の資産として将来の世代に引き継いでいく」という制定趣旨を謳った前文を置いた上で、次の３つの性格を有する部分から構成されている。

Ⅰ　府の景観施策の基本姿勢を示す基本条例
Ⅱ　府の独自施策を規定する独自条例
Ⅲ　景観法の運用に当たり必要な委任条例

基本理念と責務

条例の基本理念は、景観法の基本理念を踏まえ、良好な景観の整備及び保全に当たって「府民共通の資産としての将来への継承」「地域の自然的社会的条件との調和」「地域活性化との相乗効果」「適切な役割分担と協働」という４つの考えを重視することである。

また、府の責務は次の３つとしている。

①総合的かつ計画的な施策の策定と実施
②地域の景観に配慮した公共事業の実施
③市町村や府民の取り組みを促進する支援の実施

景観形成の土台づくり・人づくり

基盤となる施策は、次のとおりである。

①景観形成基本方針の策定：府の景観施策を総合的かつ計画的に推進するための施策目標や施策体系等をまとめるもの
②公共事業景観形成指針の策定：公共事業の実施に当たっての景観形成上の配慮ポイント、事例等を指針としてまとめるもの
③景観への理解を深める取り組み：良好な景観形成のための連携・協働が進むよう、学習支援、情報提供などの施策を進めるもの

なお、①②の策定に当たっては、府民や市町村、京都府景観審議会（本条例で設置する諮問機関。委員10名のうち１名は公募）の意見を聴くこととしている。

また、③は条例検討委員会や景観フォーラムで重要性が指摘された事項である。

景観計画に繋がる仕組みづくり

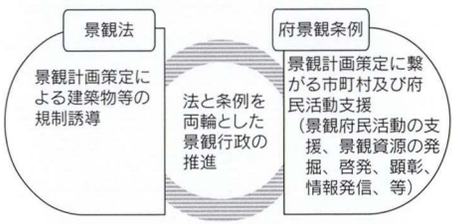
身近な景観に気付き、価値観を共有し、誇りを持って大切にする、そういう活動の中から「景観計画に繋げていく仕組み」として、２つの制度を創設した。

●京都府景観資産の登録　次世代に引き継ぐべき府内の魅力ある景観資源のうち、その保存や活用の取り組みが行われている、または今後行われるものについて、景観と活動を一体として登録し、情報の共有や取り組みの促進を図り、観光など地域の振興にも役立てようとするもの。登録は、市町村や所有者等の提案に基づき、景観審議会等の意見を聴いて行う。

●景観府民協定　景観法による景観協定が景観計画を策定した区域内に限定される上に、府内で景観計画がすぐに策定されていくという状況にない中で、府民同士の自主的な取り組みをバックアップすることを目的として、府全域を対象とした認定制度を設けた。

両施策は、規制や義務を課すものでなく、登録や認定により府民等の自発的取り組みを奨励しようとするもので、支援策として、景観やまちづくりの専門家を景観アドバイザーとして派遣することを考えている。

景観法等を活用した景観形成



府が景観計画を策定するのは、「複数の市町村の区域にわたる地域」または「府を代表する景観を形成している地域」において特に必要な区域としており、現在、天橋立周辺及び学研地区を対象として、地元意見を採り入れながら計画づくりに取り組んでいる。

京都市においては、町家保存や市街地景観と山並み等との調和が景観施策の重要テーマとなるのに対し、京都府では農山漁村における景観形成に力点を置く必要がある。

高齢化や産業形態の変化により、農山漁村の景観が荒れてきていることから、農業や観光による地域振興を図ることで、農山漁村の景観形成に繋げていくことを規定した。

また、条例制定と同時に、文化財保護条例の改正により「京都府選定文化的景観」が位置づけられたところであり、景観資産登録や景観府民協定がなされている地区からも選定できることとして、連携を図る内容となった。

景観形成は、地域の歴史、文化等の特性や、まちづくりとの整合を図る観点から、市町村が主体となるべきであり、市町村が景観行政団体として計画策定等に取り組めるよう、助言や情報提供等の必要な支援を行うことも盛り込んでいる。

条例施行は景観施策の第一歩であり、今後市町村との連携・協働の下、府民ぐるみで良好な景観づくりの取り組みを進めていきたい。

（おかもと　てつお）

京都府のホームページ
http://www.pref.kyoto.jp/toshi/

356
構造の頁

「冷却取替工法」による免震装置の取り替え

安野　郷
㈱鴻池組大阪本店建築設計部設計課主任

町田市民病院では、市民の安心できる地域医療を確保するとともに、市内に不足する医療や一般医療機関では対応が困難な医療を提供するため、増改築工事が進められている。工事は4期に分けて計画され、第1期増改築工事により東棟が2000年3月にオープンした。

現在、第2・3期増改築工事の施工中であり、完成後、第4期工事として立体駐車場工事を行う予定である（図1、写真1）。

免震装置の取り替え

第2・3期増改築工事で新たに建設する新棟と、第1期増改築工事で建設した東棟を接続することは、当初より計画されていた。しかし、第2・3期増改築工事に関するその後の計画変更等の諸事情により、第1期増改築工事で東棟に設置された免震装置を一部取り替える必要が生じた。そこで、第2・3期増改築工事に並行して、第1期増改築工事で建設した東棟の免震装置の取り替えを実施した。2006年2月中旬から3月末までの約1カ月半に、合計8基の免震装置を取り替えた。取り外した東棟の免震装置は、一度メーカーに持ち帰り、性能確認検査を行った後、新棟の免震装置として再利用する（図2）。

町田市民病院は地域の中核拠点病院であるため、工事中も医療サービスの提供を中断することが出来ない。また災害拠点病院に指定されていることから、工事中に地震等に被災しても、病院機能を維持する必要があった。そのため、当工事では免震装置を1基ずつ取り替えることになった。ここで、建物全体ではなく、取り替える免震装置周辺の躯体のみをジャッキアップする必要が生じ、免震装置周辺の躯体損傷が懸念された。そこでジャッキアップしないで免震装置を取り替える目的で、「冷却取替工法」という特殊な工法を採用した（図3）。

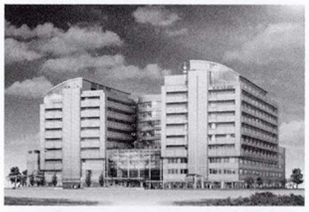


図1　完成予想パース

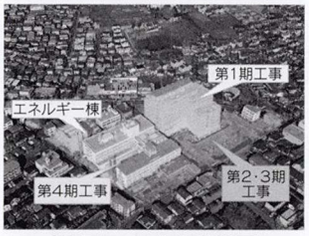


写真1　工事全体計画

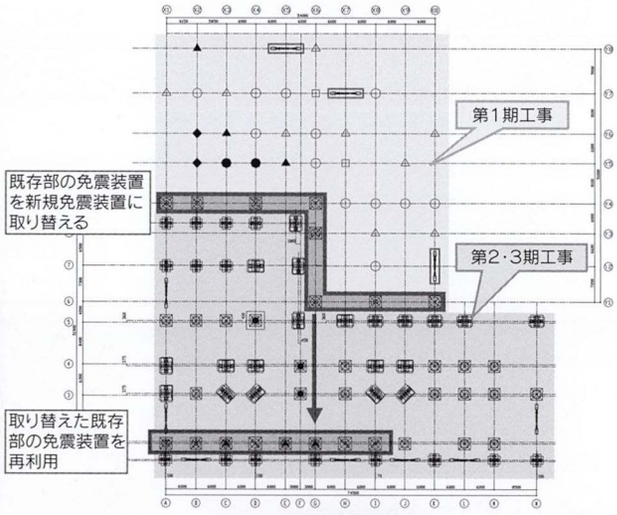


図2　免震装置配置図

●町田市民病院第2・3期増改築工事
工事場所：東京都町田市旭町2-15-41
建 築 主：町田市民病院
設 計 者：㈱内藤建築事務所
施 工 者：（建築）鴻池・曽根特定建設工事共同企業体
（電気）栗原・朝日特定建設工事共同企業体
（機械）大氣・シーエイチシー特定建設工事共同企業体

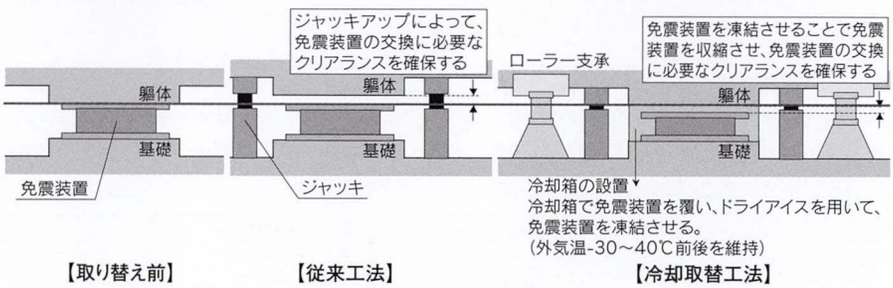


図3　冷却取替工法

工程計画・施工手順

工程計画は、事前に実施した確認実験の結果をもとに立案し、9日サイクルで免震装置を取り替えることにした。施工中は、免震装置の変位と気温を、事前実験と同様に全数計測し、事前の確認実験の結果をもとに定めた管理目標値を満足していることを確認しながら、工事を進めた。以下、施工手順を示す。

①ジャッキ及び断熱箱の設置（写真2）

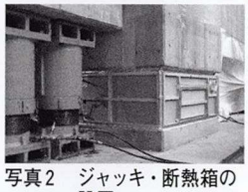


写真2　ジャッキ・断熱箱の設置

免震装置が負担していた軸力を、ジャッキに移行させる。軸力をジャッキに移行させた後、免震装置と躯体とを接続しているボルトを緩め、免震装置の周囲に断熱箱を設置する。

②免震装置の冷却（写真3）

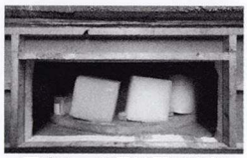


写真3　免震装置の冷却

1日2回、ドライアイスを投入し、免震装置を冷却する。冷却期間は、事前実験と施工中の計測値より4日間とした。場内に別置きされている新規免震装置の冷却も同様に行った。

③ローラー支承の設置（写真4）



写真4　ローラー支承の設置

ジャッキの脇にローラー支承を設置し、免震装置の交換中に大地震が発生しても、建物が倒壊しない措置を施す。

④免震装置の取り替え（写真5）



写真5　免震装置の取り替え

断熱箱を撤去した後、既存免震装置を取り出し、新規免震装置を挿入する。挿入後、躯体と免震装置をボルトで仮止めし、位置決めを行う。

⑤免震装置の回復

交換後、2日程度放置し、免震装置の変位回復を待つ。

⑥ジャッキ及びローラー支承の撤去（写真6）

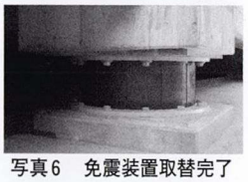


写真6　免震装置取替完了

免震装置の変位回復後、ジャッキを撤去し、軸力を免震装置に移行させる。その後、改めて躯体と免震装置を繋ぐボルトを締める。

おわりに

「冷却取替工法」を採用した免震装置の取替工事は、2006年3月末に無事完了した。今後は、本工事での経験を生かし、免震建物の維持管理や改修工事に幅広く適用していきたいと考える。　（やすの　さとし）

お知らせ Information

▶「大阪が生んだ偉才　建築家・中村順平［誕生120年］」展

本展覧会では、日本人初のフランス政府公認建築士（D.P.L.G）として知られ、日本にボザール（パリ最高美術院）流の建築教育を導入した建築家・中村順平の業績を紹介する。大阪市西区江戸堀に生まれ、旧制天王寺中学を卒業する多感な時期を大阪で過ごした中村は、大阪府立中之島図書館の竣工は彼を建築に開眼させたといわれる。今回は、彼の生誕120周年を記念し、フランス留学時代から帰国後の建築図面、スケッチ、自筆原稿等約50点を紹介をする。

■展示構成

「1.D.P.L.Gへの道」：フランフ留学時代の作品「2.建築芸術に生きる」：建築や壁面の図面・スケッチ「3.中村建築学」：横浜高等工芸学校（現・横浜国立大学）での建築教育や自筆原稿

会期　2007年5月30日(水)～7月9日(月)
休館日　毎週火曜日
時間　9：30～17：00（金 20：00）
会場　大阪歴史博物館8階　特集展示室
〒540-0008 大阪市中央区大手前4-1-32　地下鉄谷町線・中央線「谷町四丁目」駅⑨号出口前
TEL 06-6946-5728（代表）
FAX 06-6946-2662
http://www.mus-his.city.osaka.jp
入場料　大人600円　高大生400円

▶モダン・デザイン再訪：大阪コレクションズ

大阪市立近代美術館建設準備室・国立国際美術館・サントリーミュージアム[天保山]の共同企画という新しい試みの美術展である。本展は、モダン・デザインを生んだデザイン運動、すなわちアーツ・アンド・クラフツ、アール・ヌーヴォー、ウィーン分離派、ウィーン工房、バウハウス、デ・ステイル、ロシア構成主義の歴史的名品約160点が一堂に会するまたとない機会となった。モダン・デザインが夢をみた20世紀の理想郷とはなんだったのか。夢のあとを辿りながら、モダン・デザインが目指したものに思いをはせる展覧会である。



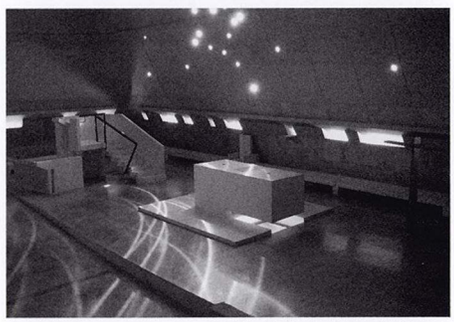
ルイ・マジョレル《鏡台》 1900年
大阪市立近代美術館建設準備室蔵

会　期　2007年5月17日(木)～7月1日(日)　10：30～17：30　休館月曜
会　場　サントリーミュージアム［天保山］
〒552-0022 大阪市港区海岸通1-5-10
TEL 06-6577-0006
入場料　大人1,000円　高・大生、シニア700円
問合せ　サントリーミュージアム
（広報　高木、木下）
http://suntory.jp/SMT/

▶ル・コルビュジエ：フィルミニの教会―光りの軌跡―

ル・コルビュジエ（1887～1965）が晩年に手掛けたフィルミニ（フランス中部）の「サン・ピエール教会」は、1978年に工事が中断した後、20年以上も放置されていた。しかし、21世紀に入って教会の完成を望む動きが高まり、いくつかの変更を経て竣工した。展覧会では、フィルミニ教会の姿を単に紹介するのではなく、50年近い年月をかけて、完成にたどり着くまでのプロセスを追いながら、教会の魅力をさぐる。

会　期　2007年4月23日(月)～7月6日(金)
10時～17時　土日、祝4月28日～5月6日は休み
入場料　無料
会　場　大成建設ギャラリー・タイセイ
〒163-0606　東京都新宿区西新宿1-25-1　新宿センタービル17F
TEL：03-5381-5510
E-mail：galerie@pub.taisei.co.jp
http://www.taisei.co.jp/galerie
問合せ(林 masa-h@pub.taisei.co.jp)



写真：ギャラリータイセイ

▶ミュージアム見学会

UCCコーヒー博物館・神戸花鳥園・大丸ミュージアム「横山大観と近代日本画名品展」を楽しむ。

日　時　2007年5月19日(土) 10：00
集合場所　神戸ポートライナー三宮駅
改札口（協会旗付近）

参加費　一般2,600円　会員2,000円
（各入場料込み、交通費、昼食代別）
申込み　企業ミュージアムの協会事務局
TEL＆FAX：06-6872-0969
定　員　20名

▶すまい・まちづくりフォーラム関西21
講演会　＜再発見＋再生＞大阪のまちとくらし

■講演テーマ
・「歴史のまち・大阪のストラクチュア」/谷直樹（大阪市立大学教授）
大阪の町の構造を読み解き、今に続く魅力を解明する。
・「よみがえる長屋の魅力」/六波羅雅一（建築家・からほり倶楽部）、塩崎賢明（神戸大学教授）
長屋の魅力を引き出し、再生する建築家の創造活動を紹介する。
日　時　2007年6月2日(土) 13:30～16:30
会　場　梅田スカイビルタワーウエスト
（大阪市北区大淀中1-1-88）
参加費　1,000円（学生500円）
問合せ　NPO法人西山文庫事務局
京都府相楽郡木津町兜台6-6-4
積水ハウス総合住宅研究所内
0774-73-5701（木・金・土　安藤）

▶2007年度社団法人都市住宅学会関西支部総会関連催事

㈳都市住宅学会関西時部の2007年度総会に合わせて、若手研究者の報告会と記念シンポジウムが開催される。
日　時　2007年5月19日(土)
会　場　大阪市立住まい情報センター 3階ホール
地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋筋六丁目」駅下車、3号出口より連絡。
定　員　ともに80名（申し込み先着順）
参加費　登竜門は学会員・非学会員とも無料。講演会は、学会員は無料・非学会員は1，000円。
申込み　㈳都市住宅学会関西支部事務局
E-mail：uhs-west@sucre.ne.jp
TEL：06-6949-5751
FAX：06-6949-5741
希望の催事名、学会員・非会員の区分、所属、連絡先を明記し、FAXかメールで申し込む。
●研究報告会/都市住宅学「登竜門」
12：20～14：15
テーマ　・「『住まいを選ぶ』っていったいなんですか？―尼崎市都市政策調査研究事業から」
伊藤裕章（尼崎市企画財政局都市政策部都市政策課）
角野幸博（関西学院大学総合政策学部教授）
・「既存住宅市場の現状分析」
上村要司（Geo Laboratory 代表）
山崎古都子（滋賀大学教育学部教授）
・「都市・農村交流による居住環境・コミュニティへの効果」
前田真子（広島工業大学環境学部環境デザイン学科講師）
小浦久子（大阪大学大学院工学研究科准教授）
●シンポジウム：「オールドコミュニティ再生と交通―計画と財政、法整備の視点から―」14：50～17：00
講　演　「(仮) オールドコミュニティ再生と交通」土井　勉(神戸国際大学経済学部都市文化経済学科教授・土木学会フェロー会員)
討　議　森栗茂一（大阪外国語大学外国語学部国際文化学科教授）河田敦弥（近畿運輸局企画観光部交通企画課長）田端和彦（兵庫大学経済情報学部准教授）

▶建設リサイクル法 府内一斉パトロール

■一斉パトロールの実施体制
・実施日／2007年5月21日(月)
・実施機関／大阪府及び府内17市（特定行政庁）大阪市、豊中市、堺市、東大阪市、吹田市、高槻市、守口市、枚方市、八尾市、寝屋川市、茨木市、岸和田市、箕面市、門真市、池田市、和泉市、羽曳野市
・重点的にパトロールを行う事項
①適正な分別解体等が実施されているか。②特定建設資材廃棄物について適正に再資源化等が行われているか。③解体工事が建設業許可または解体工事業登録業者によって行われているか。④解体工事等の届出が事前に提出されているか。
■パネル展
場所（期間）/府庁本館（2007年5月14日～18日）府庁別館（2007年5月21日～25日）
問合せ/大阪府住宅まちづくり部建築指導室審査指導課建築環境・設備グループ

▶第14回空間デザインコンペティション

日本電気硝子㈱の製品を使っての提案部門と作品例部門に分けた空間デザインコンペは14回目を迎える。
A 提案図門―課題「駅の未来をつくるガラスブロック」
…(略)「駅の未来をつくるガラスブロック」というテーマのもとに、これからつくられるであろうさまざまな駅のデザインのなかで、ガラスブロックの新しい使い方を見出して欲しい。既成概念に捉われることなく創造の翼を広げ、それを建築として着地してもらいたい。提出図面／提案の意図を表現する図面及び簡単な説明文（模型写真を含む）縮尺はいずれも自由。中判ケント紙一枚に収める。鉛筆、青焼き、墨入れ、着色など自由。
B 作品例部門―ガラスブロック、ネオパリエ＆ラピエ＆フィノ、ファイアライト、クリスタルクレイ、グラソア、チュービー、アクラス、ベルーナ、その他の日本電気硝子㈱の作品を使用した感性豊かな作品例。
応募資格／本コンペ過去1～13回の入賞作品を除き、2007年8月3日までに竣工した建築物、構造物。ひとつの登録に対し、1物件とし、設計した個人または組織に限る。
登録申し込みは、2007年8月3日（当日消印有効）。応募作品締め切りは2007年8月20日（当日消印有効）、持参は正午まで。
審査員／香山壽夫（東京大学名誉教授）―委員長―、可児才介（大成建設）、安田幸一（東京工業大学大学院准教授）、大工信隆（日本電気硝子）
・コーディネーター／馬場璋造（建築情報システム研究所）
賞　金　A（提案部門）
金賞1点100万円、銀賞1点50万円、銅賞1点30万円、佳作5点各10万円
B（作品例部門）
金賞1点50万円、銀賞1点30万円、銅賞1点20万円、佳作5点各5万円
申込み　官製ハガキ、インターネット(http://www.kenchiku.co.jp)、FAX(03-3818-6742)のいずれかで登録。応募作品も下記へ。
㈱新建築社　空間デザイン・コンペティション―提案部門か作品例部門か明記―係
〒113-8501　東京都文京区湯島2-31-2　電話 03-3811-7101(代)

▶『Les Images de Sadaharu HORIO』堀尾貞治展

会　期　2007年5月2日(水)～5月27日(日)
会　場　ギャラリー ヤマキファインアート
TEL 078-391-1666
入場料　無料

編集委員会

第12回編集委員会
3月14日（水）18：00～20：00
出席者　設楽委員長ほか4名
議　事（1）4月号90周年記念号「この10年、これからの10年」特集経過報告
（2）5月号「あそび 考」特集経過報告
（3）6月号「こだわりが創る住まいのカタチ」特集経過報告
（4）7月号「住まいの設備と空間の移り変わり」特集経過報告
（5）8月号“建築とメディア―建築の視覚的価値―”特集報告
（6）作品作風、広告企画からの報告
（7）収支状況報告
（8）その他

第6回計画系分科会
3月1日（木）19：00～20：20
出席者　三宅幹事ほか2名
議　事　2007年5月号「あそび 考」特集の企画経過報告

第10回建築計画系分科会
3月15日（木）18：30～20：00
出席者　荒木幹事ほか5名
議　事（1）2007年8月号特集について
（2）今後の予定

第5回インテリア・住宅系分科会
3月5日（月）18：30～19：30
出席者　高野委員ほか1名
議　事（1）6月号「こだわりが創る住まいのカタチ」特集の企画
（2）新年度の分科会体制について

第12回構造分科会
3月2日（金）18：00～19：30
出席者　中塚幹事ほか1名
議　事（1）「構造の頁」の企画
（2）構造特集の件

第8回設備分科会
3月7日（水）18：00～19：45
出席者　赤澤幹事ほか4名
議　事（1）「設備の頁」の企画
（2）“測定機器シリーズ”頁の企画
（3）2007年7月号「住まいの設備と空間の移り変わり」特集経過報告

第7回施工材料分科会
3月6日（火）17：00～18：00
出席者　藤丸幹事ほか5名
議　事（1）新委員の紹介
（2）特集テーマについて
（3）その他

第12回法令分科会
3月22日（木）14：00～15：30
出席者　赤井幹事ほか3名
議　事（1）「法令コーナー」の企画
（2）9月法令特集の企画の件
（3）情報交換
（4）19年度法令分科会幹事について
（5）定例日について

第12回作品作風小委員会
3月23日（金）19：00～20：00
出席者　井上副委員長ほか10名
議　事（1）作品の選定3作品
（2）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（3）「gallery」掲載報告・予定
（4）前回の編集委員会の報告
（5）その他

第12回広告企画小委員会
3月14日（水）17：00～18：00
出席者　設楽委員長ほか4名
議　事（1）4月号90周年記念号「この10年、これからの10年」特集経過報告
（2）5月号「あそび 考」特集経過報告
（3）6月号「こだわりが創る住まいのカタチ」特集経過報告
（4）7月号「住まいの設備と空間の移り変わり」特集経過報告
（5）8月号“建築とメディア―建築の視覚的価値―”特集の企画
（6）単発広告企画頁のテーマとその具体化
（7）広告掲載状況
（8）収支状況報告

出版委員会

第11回出版委員会
3月15日（木）18：00～19：00
出席者　上原委員長ほか7名
議　事（1）〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
（2）進行中のテーマについて3件

事業委員会

第7回情報見学小委員会
3月8日（木）18：00～19：00
出席者　瀬戸川委員長ほか9名
議　事（1）茶室「朝雲庵」見学会実施報告
（2）来年度事業案件について

教育委員会

第4回工高生教育小委員会
3月2日（金）18：00～19：30
場　所　OMMビル2階 4号会議室
出席者　和田副委員長ほか5名
林審査委員長ほか6名
議　事（1）第53回工高生デザインコンクール募集規定の件
（2）募集規定の最終原案作成について
（3）今後の作業予定

90周年記念式典

3月30日（金）15：30～19：45
場　所　OMMビル20階 東天紅
●記念式典
出席者　114名
●シンポジウム
テーマ　“近代建築力”再発見！
講　師　坂本 勝比古/神戸芸術工科大学名誉教授
松隈 章/竹中工務店大阪本店設計部
栗本 智代/大阪ガスエネルギー・文化研究所
出席者　148名
●祝賀会
出席者　105名

入会者（敬称略）

〔個人正会員〕
岩佐　進（㈱東畑建築事務所）
桜井　春男

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

OKUJU
Space Creator
クオリティ＆コストパフォーマンス
ALTsシステム
スナップ工法
SP-600
メタルシステム天井
内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社オクジュー
本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530-0047
TEL(06)6312-4131　FAX(06)6312-7998
東京・九州・南九州・名古屋・上海

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工
ダイダン株式会社
本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

CHOYO
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。
電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役　山本貴士
本　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

www.naniwa.com
We have hope
■印刷事業 ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業 SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作、
株式会社NPCコーポレーション
本　社　〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代) fax:(06)6352-7479
第二ビル　〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代) fax:(06)6351-0208
東京支社　〒105-0004 東京都港区新橋6-17-2
tel:(03)3433-5211(代) fax:(03)5776-7733
(旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱)

地球環境を守り、100年建築に貢献する
NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所
http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp
本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLﾋﾞﾙ
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・京丹後（0772）72－2220
舞　鶴（0773）76－0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252－6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83－2381
TEL　大阪（06）6877－1581

日本建築協会企画・販売

出版図書一覧

1917年３月に創設された日本建築協会（当時・関西建築協会）は、すでに昭和初期には大阪近辺で住宅博覧会や建築講演会を開く一方、当時は入手しにくかった建築の情報を図書の出版という形で会員に提供していた。

＊

以後、創立周年記念事業として、その時代の動きをとらえて単行本を出版している。

50周年、60周年、70周年、そして80周年に、図書の出版が企画され、現在も継続して発行・販売されている出版物は、以下のとおり。

＊

購入希望者は、㈳日本建築協会事務局（TEL06―6946―6981、FAX06―6946―6984）まで。

日本建築協会創立70周年記念出版

住宅近代化への歩みと日本建築協会 1988年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会創立75周年記念出版

工高生デザインコンクール入選作品集 1992年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格2,000円

日本建築協会建築クラブ朝食会300回記念

講演記録集 **話のはなし** 1997年

Ｂ６判５分冊　企画：日本建築協会建築クラブ

民間（旧四会）連合協定

工事請負契約約款

工事請負契約書・仲裁合意書・契約書使用上の留意事項

１部￥230（税込み）送料　実費

日本建築協会事務局（06-6946-6981）で頒布

日本建築協会創立60周年記念事業「建築技術選書」姉妹篇・四六判２色刷イラスト入

〈プロのノウハウ〉シリーズ

企画：日本建築協会　発行：学芸出版社　本体価格￥1,600～￥2,600

- 衛生設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
- 鉄筋工事・本音の現場学　荒川治徳
- 建築と音のトラブル　中川清ほか
- 木造住宅監理の話　山田　修
- 第二版 環境と共生する建築25のキーワード　大西正宜
- 木造住宅のしくみ　在来工法の基本と応用　浅野平八・東　敏博
- インテリアコーディネートの100ポイント　町田ひろ子監修／松本　茂・村元俊子著
- 木づくりの常識非常識　上村　武
- 建築の現場管理システム　伊東貞夫
- 新版コンクリート工事のチェックポイント100　加賀秀治
- 建築基準法の性能規定を読みこなすコツ　高木任之
- 建築工事の祭式　「建築工事の祭式」編集委員会
- 飛躍する構造デザイン　渡辺邦夫
- 改訂版　都市計画法を読みこなすコツ　高木任之
- 改訂版　都市基準法を読みこなすコツ　高木任之
- 改訂版　建築物の消防法を読みこなすコツ　高木任之
- プロが教えるキッチン設計のコツ　井上まるみ
- 建築トラブルにみる常識非常識　荒川治徳
- 現場で学ぶ　住まいの雨仕舞い　玉水新吾

日本建築協会創立70周年記念事業・B5判

選書特装版

企画：日本建築協会　発行：学芸出版社　本体価格￥3,000～￥4,000

- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈建築篇〉　「建築漏水」編集委員会
- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈設備篇〉　「設備漏水」編集委員会
- 建物の汚れ－トラブル事例と解決策　「建物の汚れ」編集委員会
- 建築デザインのための構造計画　須賀好富
- 入門・建築積算　生島道春
- 建物の結露－トラブル事例と解決策　「建物の結露」編集委員会

TOLI TILE CARPET
VARY SERIES
VARY
ヴァリー

T O L I　T I L E　C A R P E T

VARY SERIES
ヴァリー

新たなモジュール、広がるデザインバリエーション

東リ タイルカーペット「VARY SERIES」
ヴァリー シリーズ

従来の50cm角モジュールに、25cm×100cmの矩形タイプと、

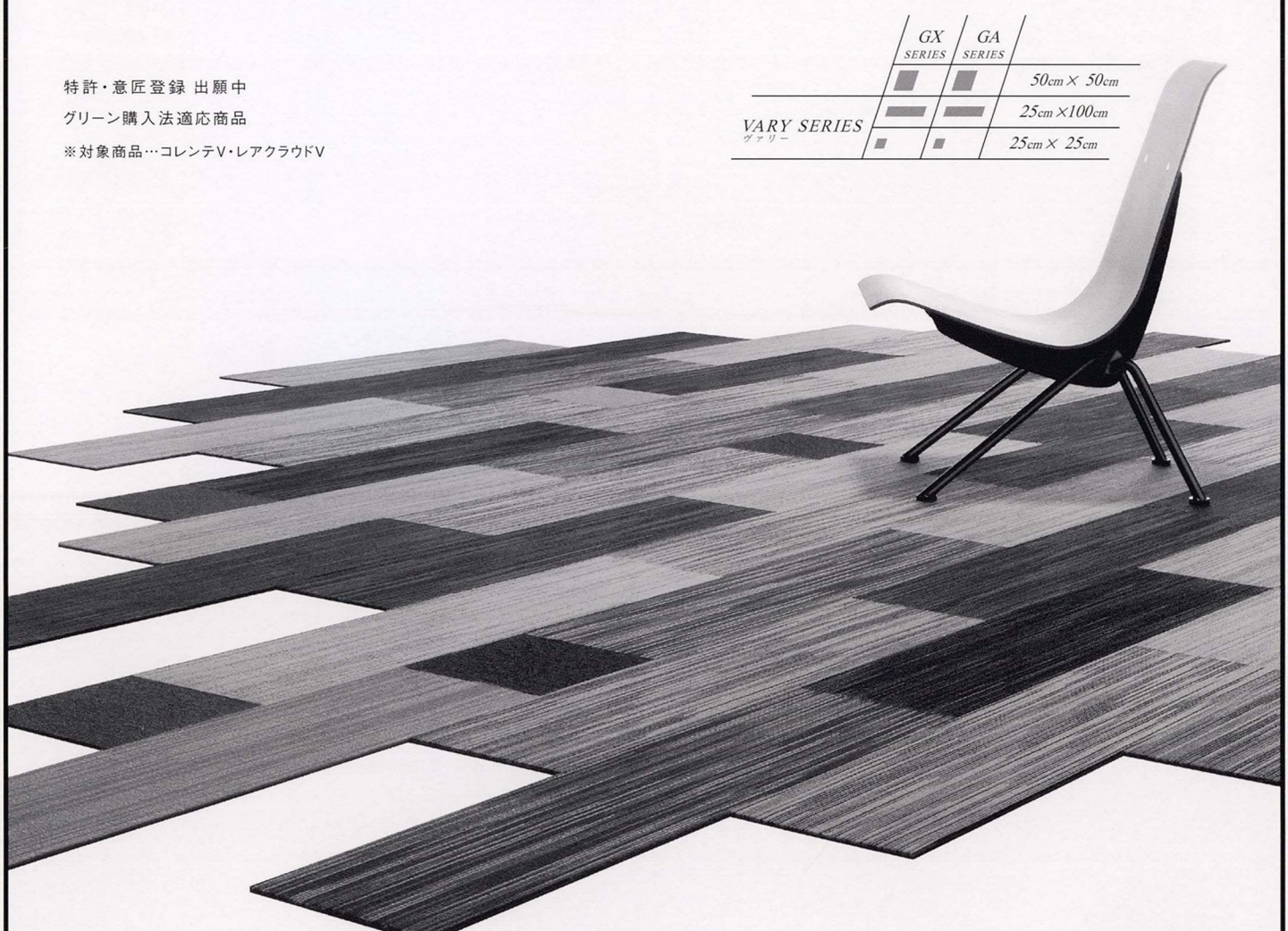
25cm×25cmのアクセントタイプを新たに加え、

コーディネートの幅を更に広げました。

自由な発想で印象的なパターンハーモニーをご提案ください。

特許・意匠登録 出願中
グリーン購入法適応商品
※対象商品…コレンテV・レアクラウドV





東リ株式会社
http://www.toli.co.jp

西日本営業開発部/TEL.06(6943)1645　札幌ショールーム/TEL.011(214)8313　名古屋ショールーム/TEL.052(745)1691
東日本営業開発部/TEL.03(5403)2067　東京ショールーム/TEL.03(5421)3711　大阪ショールーム/TEL.06(6943)1649

TOLI

建築と社会　2007.05　Vol.88 No.1022
社団法人 日本建築協会　〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 電話：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984 http://www.aaj.or.jp
毎月1回1日発行 昭和24年3月19日第3種郵便物認可 ISSN 0912-8182
定価1,200円（税込）
正会員の購読料は会費に含めて徴収